

## 数寄雑談

数寄雑談(すきぞうだん)というと、先ず『禪鳳雑談』のことが念頭に浮かぶ。この雑談集は、室町後期の能役者であり能作者である金春禪鳳が、奈良において藤右衛門尉を始めとする素人の弟子たちに能や謡に係わる事項を教えていたが、その時の談話を藤右衛門尉が書き留めたものである。禪鳳は、世阿弥の女婿金春禪竹の孫であるが、能や謡に係わる雑談をするに際して、花・茶・和歌・連歌といった他の芸能、特に茶の湯に関する談話を豊富に引き合いに出しながら説明している。これが『禪鳳雑談』の大きな特徴であり、当時の文化を貫く芸能の特徴を知るうえで貴重な文献となっている。こうしたことから「生きた能楽史料」とも云われている。

例えば、禪鳳は侘び茶の開祖村田珠光の語った雑談として、「珠光の物語とて、月も雲間のなきは嫌にて候」と語り、さらに「これ面白く候」と、自分の感想を述べるとともに当時の新しい美意識を表明している。この一文は、侘び茶の湯の始まりを論じる場合に時々

## 渡 辺 誠 一

引用される箇所であり、また当時の美意識を知るうえで貴重な史料である。

村田珠光は、侘び茶の開祖としてその名が知られているが、清嚴正徹・十住院心敬の歌論から大きな影響を受けていた。

正徹は、東山時代の初頭に活躍した禅僧歌人(冷泉派)であるが、その歌論集『正徹物語』に於いて、次のように述べている。

「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」と兼好が書きたるやうなる心ねもちたるものは、世間にただ一人ならではなきなり。此ころは生得にてあるものなり……

心敬僧都は正徹の弟子で、始めは冷泉派の歌人として活躍していたが、後に連歌の名士として知られるようになった。彼の連歌論は、後年、珠光を始め多くの侘び茶人に大きな影響を与えることになるが、その代表作『ささめごと』に於いて、前記正徹の説を次のように祖述している。

この道は、ひとへに余情幽玄の心姿を旨として、いひ残し理なきところに幽玄感情は待るべしと也。歌にも不明体とて面影ばかりを詠する、いみじき至極の事となり。「ふっとその人一人のわざなるべし」など定家卿も注し給へり。兼好法師がいふ、「月花をば目にてのみ見るものかは。雨夜に思いあかし、散りしほれたる木陰に来て、過ぎしかたを思ふこそ」と書き侍る、艶深く哉。

正徹も心敬も兼好の『徒然草』（百三十七段）の特異性に心を留めていたのである。

兼好は、月といえば満月美、花といえば満開美を謳うのが風潮であり、長い伝統であった時代に、「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」と強調していた。もうじき咲くであろう桜、散り萎れた花、欠けた月、雨雲に閉ざされた月は情趣の深いものである。雨もよいの空に向かって月を恋い慕い、咲く花の美しさを部屋に引き籠ったままで精一杯想い描くのは、極めて味わい深いものである。兼好にとって、月は「望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁近くなりて待ち出でたる」が大変趣深く、また「青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど」や「椎柴・白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたる」様などが、この上なく情趣深く感じられたのである。

兼好の美的感性は、中世の文芸に画期的な変革を齎したのである。

心敬は「かすかなる所に心をかけ給ふべし。ひとへ（一重）白梅の竹の中より咲いて、雲間の月を見る如くなる句がおもしろく候」『古代中世芸術論』と、情趣深い自然の姿を捉えるよう推奨している。

さて、禅鳳は、奈良の豪商、坂東屋の座敷で弟子たちを前にして、次のような雑談をおこなっている。

十七日夜、坂東屋にて雑談有。能は結構なるはある物也。金にて茶の湯の道具の物語、細々被申候。数寄の方は、備前物の割れたるには劣り候べく候。ただ能の方は、凍み氷れたるが面白く候……与四良来り、数寄によそへて能物語候。結構見事申さば、是までも被申候、金の風炉・鍮子・水さし・水こぼしにてあるべく候へ共、泌みはせまじく候。伊勢物・備前物なりとも、面白く工み候はば勝り候べく候。

この雑談は、茶の湯の始まりの頃、唐物道具のみを用いて茶の湯を楽しんでいた時代に、備前・伊賀・信楽などの和物道具の使用を敢行し始めていた頃の話である。

禅鳳は、唐物の水指や水翻は結構見事なものであるが、「備前の割れたるには劣り候べく候」「凍み氷れたるが面白く候」「沁みはせまじく候。伊勢物・備前物なりとも、面白く工み候はば勝り候べく候」と、伊勢ものや備前ものの道具の良さを強調している。外面的な美しさより内面的な美しさ、内部から染み出るような深みのある美に心を捉えられた美意識は、当時の芸能の心・型・技法、それら

を取り巻くさまざまな状況を知るうえで貴重な手がかりを与えてくれる。また侘びの萌芽の究明には無視することのできない美的感覚である。

『禪鳳雑談』のこの記事は、永正十三年（一五一六）に書かれたものである。信楽焼・備前焼が記された文献は、『久政茶会記』（天文十一年四月九日、「信楽水指、壺二置合」）、『宗達他会記』（天文十八年十二月十二日、「水こぼし、ひせん物」）、が初出である。これは会記に記された記録であるので、実際はそれ以前に既に茶人気取りの人々によって、備前物・信楽物が用いられていた。こうした現象を諷めたのが村田珠光である。

文亀二年（一一五〇）村田珠光は弟子である古市播磨澄胤に与えた遺文「心の文」で次のように述べている。

当時、ひふかる、と申て、初心の人躰がびぜん物・しがらき物などをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道断也、かる、と云事ハ、よき道具をもち、其あじわひをよくしりて、心の心地によりてたけくらみて、後までひへやせてこそ面白くあるべき也……

当時初心の者が、流行しているからと言って、備前物・信楽物などをを用いて「冷え枯れた」侘びの境地に至った気ているのは、とんでもないことである。「枯れる」ということは、唐物などの良い道具を持って、その良さを十分味わい尽くし、心底から枯淡の境地に至って、後々までも「冷え瘦せ」た状態を保ち続けること、これが

素晴らしいのである、という。

この「心の文」は、珠光の侘び茶湯の精神が凝縮された含蓄のある文章として、利休をはじめ多くの弟子たちが玩味し、賛嘆した一紙である。

唐物一辺倒の茶の湯の世界に、和物の道具が登場し、金の道具といえども「備前物の割れたるには劣り候べく候」、「伊勢物・備前物であっても、面白く工み候はば勝り候べく候」という茶の湯独自の価値観が打ち立てられたのである。こうした意味からも、『禪鳳雑談』の記事は当時の人々にとっても、現在の茶の湯関係者にとっても、貴重な記録であると云える。

これらの雑談は、語り手と聞き手によって伝承された秘伝が書き留められることによって誕生したものである。それらは逸話となつて初心者たちの指導教材となり、数寄雑談として活かされてきたが、茶の湯の点前・技術・道具の伝来から茶室・露地にいたるまでの多岐にわたる秘伝的部分を含んでいる。茶の湯の秘伝はもともと口伝であり、その相伝を受けた者以外にはそうむやみに他の人に教える性質のものではなかった。

千宗旦は、「茶の道は心に伝え、耳に伝えて一筆もなし」という歌を残している。芸道の伝承は以心伝心と云われているように、師の心から弟子の心へ直に伝えられてこそ本物となる。これができない場合には、「耳に伝え目に伝える」方法が採られる。つまり師の言動を弟子が見て悟ることである。師自身が筆墨によって伝承する

ことはあり得ないことであった。『禪鳳雜談』の場合、禪鳳の弟子が聞いたことを間違って伝えないように、また忘れないようにとの気持ちから書き留めたものである。

千利休の愛弟子である山上宗二は、利休から伝えられ、教示された事項を書き記し、『山上宗二記』という秘伝書を後世に残したが、肝心な部分には、「これについては口伝がある」「このことについては、古人も秘事としてきた」と記すだけで、いちばん肝心な部分は相変わらず口伝とされていた。

江戸初期の茶人、久保権大輔利世は寛永十七年（一六四〇）に『長閑堂記』という随筆を書いたが、その内容は、彼の家柄、両親の素性、少年時代の修道、北野大茶湯などを筆頭に、彼の見聞したさまざまな逸話や名物道具の来歴などが記されている。特に千利休・小堀遠州・古田織部などに関わる数寄雑談は、今日でも多くの人々に活用されている。

利世は、まず最初に、自分の出自を回顧しながら次のように語っている。

老の寢覺の夜な夜なこしかたの世の中をおもふに、わがこのみし茶湯かたの品々、うつりかはるありさま、そのうつは物となれるはしめ、年わかきものききのままなれハ、傳へまちまちにして、心もさたかならねハ、終にその本をうしなふ習ひ、子のため口おしく侍れハ、まのあたりおほへし事をかきとめて、家のこして我身のくらしけるをもしらしめハ、わかき世にお

こりをしりそくる道なりなんと、あたる筆をついやすのミ、あらあら人のためならず、あなかしこもらすへからすといふ。享和三年癸亥年（一八〇三）七月、逍遙省主人公般は『長閑堂記』について、次のように記している。

……侘数奇の情を批判して、風雅の趣深く、いにしへ名ある茶人のこころはせも今見る心持して、いとおかしくおもふまま、もとよりあつさにちりはめし書にもあらねは、世上の流布もすくなからん歟、しかあれは、作者の名譽もおとろへ侍らんやとおもはれて、なを人にしらせまほしく思は、元祖上人の御事さへたまたま書あらはせる、かたかたひとひふた日のいとまを、おします写し侍りぬ

『長閑堂記』の数寄雑談を幾つか列挙してみよう。

つるへの水さし、めんつうの水こほし、青竹のふたおき、紹鷗、或時、風呂あかりに、そのあかりやにて、数奇をせられし時、初てこの作意有となん……

宗易ハ秀吉公の御師にして、しかもその才智、世にすぐれたる人なれハ、天下おしなへ此下智をまなはずと云事なし、後は利休居士と申せし、さる程に、昔の名物とも、皆おしこミすたり、茶湯あらたまり、昔の開炉裡八寸六寸を四寸になをし、ふち壺寸壺分、土段壺寸壺分、土段の内九寸六分にして、釜は九寸の谷と定められし、この時、有馬の湯本にありし阿弥陀堂の釜をもとめて、その釜の移し、世にあミた堂と号してはやれり、く

さり自在もすたり、皆五徳すへとなり、茶具、今焼茶碗、茶入に聚大中小有て、清甫と云ぬしせり、当地林小路興次といふぬしは中次のうす茶入天下一たり……

かの山の上の宗二、さつまやとも云し、堺にての上手にて、物をもしり、人におさるる事なき人也、いかにしても、つらくせ悪く、口悪きものにて、人のにくみしもの也、小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、その罪に、耳鼻そかせ給ひし、其子を道七とて、故相国様の茶道して、御奉公申せし、又、父の伝をうけ、短氣の口わる物にて、上様御風炉の内あそはされし跡をみて、つきくくし仕なをしけるによりて、御改易に逢、牢人して、藤堂和泉殿伊予在国の時、下国し、その申ひらきなとして、我も有合て、一冬はなせし也……

数奇をたしなまん人ハ、ふたん茶独りたてましき物也、本客の時、かの自由おもわす出て見るしき也、惣別、茶湯に手上手浦山しからぬ物也、手くくつ・しな玉とりをみる心地せり、又、巧者もうとましき物也、あふらしミしたるむさけ有、只浦山敷は目利の人、作意ある人、是数奇の根本たるへし……

これらは、茶人たちには良く知られた雑談であり、研究者たちによって実際に活用されている雑談である。『長閑堂記』は、子孫に残された遺戒であり、秘伝書ではない。

秘伝は院政期（平安時代後期）から芸能の世界で、主として楽の領域で使われていたが、次第に文芸・蹴鞠・筆道などの分野で盛ん

に使用されるようになった。やがて古今伝授などの権威ある秘伝体系も誕生するようになった。

秘伝は、密伝・秘事・秘儀・奥義などとも呼ばれている。世阿弥は父観阿弥の遺訓を『風姿花伝』としてまとめ、日本最古の能楽論を書いた。更に様々な芸談を次男元能が筆録した『申楽談儀』など二十一種の論書を残した。これらの論書は、生存競争に勝ち抜くために書き残された秘伝書である。修業教育論、演技、演出、作劇術、人生論にいたるまでの秘事が記されている。これらは、他の猿楽者にかんして勝つかという実践的戦略論である。

此別紙の口伝、当芸において、家の大事、一代一人の相伝なり。たとい一子たりというとも、無器量の者には伝ふべからず。

「家、家にあらず、継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす」と言えり、これ万徳了達の妙花を極むる所なるべし。 (『風姿花伝』)

世阿弥は芸の継承を極めて厳粛なものと考えていた。

禅の思想も「不立文字」「以心伝心」などといって秘伝の特質を言い当てている。

山上宗二は秘伝書（『山上宗二記』）の最後の部分で次のように記している。

総じて茶の湯には昔から（この道について記した）書き物などというものはなく、唯々、唐物名物を数多く己の眼で見て、上手の茶湯者の茶会に時折参じ、創意工夫おさおさ怠りなく、昼

といわず夜といわず茶の湯一筋に専心の覚悟、これを措いて他に師匠は無いものである。この一紙目録は、初心者の方には極めて貴重なものではあろうが、数寄者には不要のものでもあろう。古い経文にも記されているが、月を指さして教えるとも月を見ないで指を見る（月は仏の教え、指は仏の教えを表現した教典）譬えもあるように、物の道理を説いてもその本旨を認め得ずにその文言や言語に拘泥して詮索に耽るのが落ちであるから、所詮茶の湯などの場合、文言などというものは、奥義を究めんとして教えを乞うに当り門を敲く瓦のようなものにしか過ぎない。此の一紙目録は、先師以来相伝の書き物であるが、私は尊師利休について二十余年間に亘り茶の湯の稽古に精進を積んで来たが、その間に授けられた様々な秘事に、今新たなる考えを付け加えることにした。この秘伝書に類する書き物は、この世には一つもない。……それに、茶の湯の為にとの、自ら直々の慎ましくも懇ろな切望もだしがたく、先師以来の決まりに則り、宝印と血判を捺された誓紙を下されたので、このようにして目録を巻き上げる次第である……

山上宗二は、茶の湯には昔から書き記したものはないと強調した後、茶の湯を学ぶには先ず唐物の名物道具を数多く見ること、自分より優れた茶の湯者の茶会に参加すること、亭主の創意・工夫をつねに心に掛け、それを自分の作意として活かすこと、茶の湯一筋に専心することが肝心である、と述べている。

集雲庵の南坊宗啓は『南方録』の劈頭で、茶の湯の根本について、次のような雑談を記している。

宗易ある時、集雲庵にて茶湯物語ありしに、茶湯は台子を根本とすることなれども、心の至る所は、草の小座敷にしくことなしと常々の給ふハ、いか様の子細か候と申、宗易の云、小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修業得度する事也、家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事也、家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事也、是仏の教、茶の湯の本意也、水運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、ミナミな仏祖の行ひのあとを学ぶ也、なを委しくハわ僧の明めにあるべしとの給ふ。

室町時代から桃山時代にかけて、連歌・能・茶の湯などの芸能は禪的精神が採り入れられ、それを精神的基盤として修養的な側面と宗教的な面とを持った芸道へと展開することになったのである。

数寄雑談は、今日では『分類草人木』『茶話指月集』『源流茶話』『茶湯古事談』などの伝書となって多くの人々に知られているが、本来は茶席において語り合う性質のものであった。ふた時（四時間）にわたる茶会（茶事）は、一期一会の覚悟のもとに一座建立を確立する訳であるが、その場を保つための手段としては、数寄雑談は不可欠な要素である。

数寄雑談については、昔から次のように伝えられてきた。

清話をこととし、愁ひをわすれ、苦をぬくを宗とす、科頭ニシ

テ箕居ス長松下（冠や頭巾をかぶらずに、高くそびえる松の木の下に、足を投げ出して坐る）こころ也、雖然、初心ノ若輩は、言葉少にして、巧者先達ノ物語を聞居たる躰よし、或名物の由来、名人の仕付など、上古・中古之次第を尋たるおもむき、尤しかるべきなり……（『鳥鼠集』）

一、初心の人は言葉すくなにして、巧者先達の物語を聞居たる體しかるべき哉、もし興に乗せば、名物の由来、名人のしつけ、上古中古の次第などを尋ぬべし……（『喫茶雑話』）

一、会席ニテノ物語ハ、其日ノ寒熱、天氣ノ晴晦、風雨花月等ヲ語り出スベシ、唐物ノ由来、古人ノ数奇ノ仕様、其ノ名物ハ数奇ニ入タルヤ、名物ナレドモ思ヒ所アルヤ、此名物ハ何トシタル謂レニテ御物ニ成タルナドハ、巧者・老者ノ雑談ナルベシ、若輩ニハ不似合……（『分類草木』）

一、茶湯座敷ニテ物語モ其具其具ニ随テ有ル物也。假令バ、連歌杯ノ発句脇句第三句杯ノ様ニ可有事也。宗珠迄ハ夫レヲモ知シ也。近代此道絶タリ……（『和泉草』）

数寄雑談は、山上宗二も指摘しているように、唐物名物の由来・その特徴、名人たちの所作、老熟者の物語などであるが、若輩の者はできるだけ聞き手となり、あまり知ったか振りはいないほうが良いのである。

茶の湯、即ち茶会の主眼は、心を込めて挽いたお茶を一服飲んでいただくことであり、秘蔵の道具を見ていただくことである。亭主

と客とが一期一会の覚悟のもとに、精神的な触れ合いを、つまり、互いに直心の交わりをする訳であるが、特に懷石は亭主の人間性を表徴するものである。その趣向によって直心の交わりは更に深まるのである。その際「豪華なものでも粗末なものに見えるようにするのが肝要」（『山上宗二記』）なのである。懷石は料理の内容や多少で評価されるものではない。豪華な料理を亭主と客とが共に味わうのではなく、亭主は、自ら工夫した料理を自ら運び、ひたすら客をもてなすことに心を尽くすのである。亭主の心が盛り込まれた懷石とならなければならぬのである。「振舞はこまめの汁にえびなます亭主給仕をすればすむなり」（『長閑堂記』）。亭主が自ら立ち働き、自ら給仕することに大きな意義があるのである。亭主の心が客に響き、客の心が亭主に反響する。互いの心が響き合い、共鳴することによって一座は建立するのである。その響きあいが一座のうちに高まり、また静まりするうちに茶会は進行するわけであるが、茶会の成功は数寄雑談の成果が大きく関わっている。数寄雑談がうまくいくかどうかによって、茶会の成果がきまるといえる。

山上宗二は茶会に招かれた客として振舞うべき心得として次のように述べている。

おおよそ客人としての心得は、一座建立にある。これについては、その一つひとつに多くの蜜伝がある。この一座建立について、紹鴎は初心者のために語り置かれた。しかし現在利休は、こうした振る舞いについて語ることを嫌われているが、たまた

まある夜話の時に、珍しくこんなことを話してくれた。まず第一に、朝夕の茶会であらうとも、珍しい道具を披露する茶会であらうとも、口切の茶会では云うまでもないことであるが、通常の茶会であっても、客は露地へ入ってから退出するまでの間、これが生涯に一度限りの茶会だと心に刻み込み、亭主に深く心を注ぎ、亭主を敬うべきである。訴訟のことや、世間の雑談などは一切してはならない。夢庵（牡丹花肖柏）の狂歌にこういうのがある。

我仏 隣ノ宝 婿舅 天下ノ軍 人ノ善悪（自分の宗教、隣の財産、家庭内のいざこざ、政治のこと、いくさのこと、人の噂話）

茶座敷では、これらの話題に触れてはいけない。このことを、この狂歌によってわきまえておくべきである。茶の湯の雑談では、風雅の道にふさわしいことを話すべきである。そうは云っても、亭主が茶を点て終わるまでは無言でいなければならない。宗二は、客として振舞うべき心得をかなり具体的に、しかも解り易く説明している。まず、武野紹鷗が初心者のために一座建立という言葉の意味を説明したと述べている。この一座建立は能楽論『風姿花伝』に、「この芸とは、衆人愛敬を持て、一座建立の寿福とせり」（この芸は、大勢の人に愛され喜ばれることによって、一座成立の幸福とする）とある。これは能楽の一座を経営していくうえでの目安を述べたものである。紹鷗の説明した一座建立は、内容的に

は同じく世阿弥の主張した「一座成就の感応」と同じ意味である。つまり演技者と観衆とが一体となってその雰囲気醸し出し、その場に於ける目的を達成することである。一座建立の精神は、連歌の世界においても重要であり、寄り合う者の意向や気持ちが一つになること、完全に一致することが必須の要件であった。これは当時の寄り合い芸能・文芸に共通した精神であったが、紹鷗の時代になって具体的に強調されることになったのである。茶の湯においては、亭主と客とが狭い茶室に出会い、限られた時間と場所で、一碗の濃茶を通して、直心の交わりをするわけであるから、一座を建立するためには、何よりも亭主と客の心掛け、その覚悟が大切になる訳である。

利休は、亭主と客とは互いにどのような心得をしたら良いのか、という質問に次のように答えている。

イカニモ互ノ心ニカナフガヨシ、シカレトモカナイタガルハア  
シシ、得道の客・亭主ナレバ、ヨノツカラココロヨキモノ也、  
未練ノ人互ニ心ニカナハウトノミスレバ、一方、道ニチガヘバ  
トモトモニアヤマチスル也、サレバコソ、カナフハヨシ、カナ  
イタガルハアシシ（『南方録』）

お互いの心が極めて自然に一致するのは良いのであるが、無理に叶おう、合わせようとするのと却って外れてしまうことになる。諂いの心は叶おうとする気持ちから出るものであり、客の褒めすぎもまた同様である。



次に、山上宗二は亭主として振舞うべき心得として、次のように記している。

亭主としては客人を心の底から敬うべきである。貴人や茶の湯上手（巧みで、優れている者）に対しては勿論のことであるが、普段日常的に寄り合うような人々に對しても、心の底ではその人が名人であるかのように思うべきである。あるいはまた、上の者に対しては粗略にあっさりとは振舞ってもよい。互いに客となって招待し合うのが肝要である

亭主は道具の取り合わせや懷石の仕立てなどを通して亭主自身の人間性を表徴する訳であるが、客がそれを素直な気持ちで受け止めることによって、両者の間により深い交わりが生じるようになるのである。亭主の心が客に響き、客の心が亭主に反響する。互いの心が響き合い、共鳴する事によって、一座は建立するのである。意識的にたくらんだり、氣に入られようと自分のことばかり考えていたのでは、一座建立は成立しない。

侘び茶の品質は、清浄無垢の仏世界を表しているものであるから、「コノ露地・草庵ニ至テハ、塵芥ヲ払却シ、主客トモニ直心ノ交」わりをしなければならぬのである。規則や置合せの寸法、点前の巧拙など、客は亭主の間違いを見つけては批判し、亭主は客の間違いをあざけるようになってしまつては、その茶事は失敗どころか、催さないほうがよかつたことになる。我慢・我執（高慢な心、うぬぼれる心と自分に執着して我をはる）が捨てきれないというこ

う結果になってしまふのである。

利休は、「大名の氣にいらぬことや茶会が巧みにできることばかりに心を掛け、金持がこういうことを好むのを幸いとして、欲得ずくで行う茶の湯」（『南方録』）が世間に流布していることを憂えており、呆れた振る舞いを伴う遊芸化した茶の湯に行き先が思いやられる、と言っている。

後年、幕末の大名であり茶人である井伊直弼は、宗二の主張する「二期二一度之参会」という記事を受けて、茶人の心構えを次のように記している。

抑、茶の湯交会は、一期一会といひて、たとへば幾度おなし主客交會するとも、今日の會にふたたびかへらさる事を思へば、実に我一期一度の會也、去るより、主人ハ万事二心を配り、聊も鹿末なきやう深切実意を盡し、客ニも此會に又逢ひかたき事を辦へ、亭主の趣向、何壹つもおろかならぬを感心し、實意を以て交わるべき也、是を一期一会といふ、必々主客とも等閑にハ一服をも催すましき筈之事、即一會集の極意なり（『茶湯一會集』）

今日の茶会が生涯にただ一度限りであることを自覺し、亭主も客もすべてにわたつて誠心誠意をつくして一座建立に努めなければならない。こうした心構えをもって茶会に臨むなら、世俗の雑談（ざつだん）などできるはずがないのである。茶席では数寄雑談によつて会を高めなければならないのである。因みに一期一会という言葉

は、今日では茶の湯に限らず他の領域でも、「貴重な時」を示す言葉として使用されているが、この『茶湯一会集』から生じた言葉である。

『山上宗二記』では、「数寄雑談の事」として、「この雑談の話題は、昔の人が申し伝えて来た古い名物道具の鑑識、茶会についての世評、茶の湯の上手から二十年以上も習うべきこと」を挙げている。既に触れたように、名物道具の由緒・伝来とその特徴、侘び茶人の系譜、茶人の心の持ち方などは数寄雑談の格好の材料となるものである。しかし、これらの材料は何の働きかけもせず、ただ安閑としていて入手できるものではない。積極的な働きかけがなければならぬ。その一つの手段として、『山上宗二記』を読むことが挙げられている。

今日では唐物の名物道具などはそう簡単に見たり、手に触れたりすることはでない。しかし『山上宗二記』を読むことによって、名物道具の名前・その由来・伝来・特徴、それに茶人の心得などをつかむことはできる。従って、この秘伝書は「初心者の方には極めて貴重なもの」であり、数寄雑談の格好の材料を提供することになるのである。

山上宗二は、「つくも茄子」の茶入に関する情報を細々と記した後、「この茄子の茶入は焼失してしまって、現在では拝見できない名物であるが、侘び茶の湯の雑談のために記しておく」と認め、又、「珠光の小茄子」についても同様に、茶入の伝来や姿・形・釉薬の

具合などを詳細に記した後、「これらのことは、師匠利休がよもやま話をされた折、詳しく聞いたことがある。私は、宗瓦とは仲が悪いので、この茶入をまだ拝見していない」と認めている。宗二は自分で見ていないものでも、師匠から聞いたことなどはすべて書き留めておいたが、初心者の雑談に役立つと考えていたからである。

初心者の雑談として肝心なことは、茶会の席において師匠から様々なことを聞くことであつた。つまり、初心者は師匠に、点前の詳細・露地・懐石・道具等などの不明な事柄を質問すること、つまりこれが茶の湯の稽古となつていたのである。それを証明するために、『茶之湯道聞書』を挙げるができる。

『茶之湯道聞書』は、その題名からも判るように、茶の湯に関する聞書であるが、ここでは、師弟のあいだでさまざまな質疑応答がかわされている。そうすることによって茶の湯の実態を学んでいたのである。

例えば、「昼ト朝之客参時分、昼ハ九つ半の頃か、朝ハ七つ二参てよきかと尋候へハ、七つ半ノ頃可然ト也」「釜のふた、ふくさとゆひの事とい候へハ、宗且などハ初中後ゆひニテト被申也」「中程に釜のふたする時ハ如何ト申候へハ、柄杓ヲ取、ふた置ヲ直シ釜へかけ、扱水サシのふたヲ取ルト也、茶わん廻り候内かと申候へハ、茶わん前へ来りてよきとのよし」「路ニ定り候うへ木、うえやう尋候へハ、……」「水ノ打やう尋候へハ、……」「水サシ又ちやわん置合尋候へハ、……」等などと記されている。また「白炭五六本、た

たミへはさミ落被申て、数寄者之我等へふしつけミせ候トテ笑こほれ候、すミをゆひニ而被入、……」などと、師匠のしくじり等も明記され、興味深い茶書となっている。

その終わりの部分では、「此道ハ言ておしえ候計とてハ有ましきと候、とい候事ヲこたへおしへ候ハ大事也、其ヲ留書シテ置たるはつなれハ、其師の心ニかない、ワカ物ニ？ 成候所ヲおしえたる事なれハ……」と聞書誕生の事情を語っている。こうした面から『茶之湯道聞書』は茶の湯の稽古には大切な伝書であると同時に、数寄雑談の集大成とも言うべき貴重な茶書である。

### 茶会記に見られる数寄雑談

茶会記は、通常、茶会の行われた日時、場所、席主名、客名を先ず記し、当日使用された道具、懷石料理、その他を書き記したものである。その内容は、単なる記録程度のものから、茶会の雰囲気、当日語られた数寄雑談、当日の社会情勢などが詳細に記録されたものなど、様々である。茶会当日には、さまざまな雑談がおこなわれているわけであるが、それを実際に記録した会記は数少ない。茶会記は、天文二年（一五三三）三月二十日、松屋久政が東大寺内の四聖坊へ招かれた記事から始まり、今日に至るまで相当数の茶会記がある。この小論では、桃山時代に記された四大茶会記、『宗湛日記』『松屋会記』『天王寺屋会記』『今井宗久茶湯日記』から今日でも数

寄雑談として活かせるような雑談を採り上げ、それについて考察することにした。

### 『宗湛日記』

四大茶会記の中で数寄雑談が一番多く記されている会記は、『宗湛日記』である。

神屋宗湛は島井宗室と並ぶ博多の豪商であるが、豊臣秀吉による登用を契機に、茶の湯の世界に没入することとなった。

秀吉は、関白殿下となった時点ですでに大陸遠征の野望を抱いていたが、それを実現するためには、織田信長が堺の町衆を抱え込み、戦略の要としたのと同様に、博多を前線基地として確保する必要がある。軍事品・軍資金の確保とその輸送には、軍事基地となる博多町衆の同意と協力が不可欠であった。ここで秀吉の思いついたのが博多の豪商宗湛の登用であった。

天正十四年十月、神屋宗湛は秀吉の意向に応じて肥前唐津村を出発、上洛を決行した。『宗湛日記』の始まりである。

天正十四年丙戌小春廿八日ニ、上松浦唐津村ヲ出行シテ、同ミツ嶋ヨリ舟ニ乗り、筑前国カブリノ村ニ着、ソレヨリ陸地ヲ上リ、下関ヨリ舟ニ乗り、兵庫ニツク也、陸地ヲ上リ、同霜月十八日ニ下京四条ノ森田浄因所ニツキ宿仕ナリ、廿日ニ愛宕山ニ参詣仕、ソノ日、山雪ニテ寒事、殊外也、廿一日ニ下向仕、同

宿ニ休也、廿三日、上京宗及老御宿ニ始テ参ル、宗湛又宗伝兩人、其時ニ不時ノ御振舞アリ……

十二月三日寅刻、下京四條ヨリ、サシズニテ大徳寺ニ参ル、大雪ニテ、洛中三尺ツモリ、乗物モ難成艱也、門外ニテ夜明也、惣見院ニマイリ、案内申候ヘハ、文首座ノリヤウニ先ヨビイレテ、朝食アリ、三ノ膳マテ、ケツコウニ御馳走アリ、其後ニ、客殿ニヨビイダサレ候、古溪和尚被成御出候テ、御目ニカカル也、サソロテ、内ヨリシヨク持出、エン向テ置、ソノ上ニカミソリ一禿、又香炉香合ヲ置候、先 和尚様御出ソロテ、香一炷タキテ、カミソリアテテ、三度モンシン有テ、本ノ如クカミソリヲ置候得ハ、其後ニ僧衆ヨリ、カミヲソラレ候、法艱仕也、和尚依尊意ニ、本尊ニ三拜仕也、サソロテ、三方ニ御ホウシヨ一重ヲシキ、白梅一枝ヲキ、御肴両種有之、其後、ニウメン出、其時ニ、土器一重ヲ足打ニスヘテ出、御酒五返、又肴三種アリ、ヤカテ罷立、下京宿ニテ、則コシラヘ、堺ニ罷下ニ……

永島福太郎氏によると、宗湛の上洛は大友宗麟の勧奨があったし、その親族で博多町衆の大御所たる島井宗室と協議したうえで、その事であつたらしい。「大友氏の領国は博多の商圏に属しており、島井・神屋は大友氏の御用商人だった」（『中世文化人の記録』）。

上洛した宗湛の面倒をみたのは、天王寺屋津田宗及であり、宗湛の案内役は、堺に在住する博多出身の宗伝が当たった。宗伝は堺では博多屋と称して、国許博多とは絶えず往来しながら、商売に勤し

んでいた。

宗湛は、上洛してからは毎日のごとく、天王寺屋道叱・津田宗及・宗伝・天王寺屋宗云などから茶の湯に招待され、まさに茶の湯三昧の生活が続けていたが、天正十五年丁亥正月二日、道叱老の茶会の最中に、津田宗及からの手紙が届けられた。

濃茶過咄候内ニ、大坂ヨリ宗及老御狀ト迎馬ニ飛脚相添テ被遣候、明日三日朝御城ニテ、関白様大名衆ニ大茶湯被成候、サ候ヘハ、宗湛事ヲ富田左近トノ、関白様被成御取合候處ニ、サラバ明朝御茶ヲ可被下之由被仰出候ホトニ、早々御進物ヲ用意仕テ可被越之通承ニ付、イソキウス茶アツテ罷立ツ也、則進物ニハ虎皮一枚・大豹皮一枚・照布二端・沈香一斤大坂ニ持参候也……正月三日早朝（午前四時）、宗湛は準備した進物、南蛮渡来の虎皮・大豹皮・照布・沈香を携えて宗及に伴われて大阪城に到着した。御城の御門外で利休を紹介され、初対面の挨拶を交わした。大名小名たちも乗物または徒歩で続々と集まってきた。午前六時、堺衆五人と同列して待合の広間に入った。

奥ヨリ石田治部小輔トノ御出有テ、宗湛一人ハカリヲ御内ニ被召連、御茶湯ノカサリヲ一返拝見サセラレ候、其後、又本ノ広間ニ罷帰、ソレヨリシバラク有テ、進物ヲ上致対面也、ソノ後ニ堺衆五人也、則参上候テ、御力サリヲ拝見仕候ヘトノ 御説ニテ、関白様御跡ヨリ各同前ニ拝見仕候處ニ、筑紫ノ坊主ドレゾト 御尋被成候得ハ、是ニテ候ト宗及御申候、被 仰出ニハ、

ノコリノ者共ハノケテ、筑紫ノ坊主一人ニ能ミセヨトノ御錠候條、堺衆ミナ縁ニ出、宗湛一人拜見仕、ソノ後又エンニ罷出、シバラク御飾ヲ見申也、又 関白様御錠ニハ、多人数ナルホトニ、四十石ノ茶バカリニテハタラマイホトニ、ソノナデシコト松花ノ茶ヲ今ヒカセテ、各ニノマセヨト被 仰出候へハ、則松花ノ御壺ヲ宗易、撫子ノ御壺ヲ宗及、床ヨリ持ヲロシテ、御茶取出ソロテ、又本ノ処ニナヲシ被置候テヨリ、御膳出候時、我々共ハ罷立、次ノ広間ニ罷居候へハ、関白様 御錠ニ、ツクシノ坊主ニメシヨクワセヨト被仰出候ホトニ、御前ニ罷出、大名衆同前ニ御食被下候也、サソロへハ、多人数ニテ御座敷ツマリ候ホトニ、座敷マン中ニナヤ宗久ト宗湛ト、ウシロヲ合テ罷居候、其外ニハ京堺ノ衆トテモ一人モ 御前ニ無之、又御カヨイノ衆多人数ナリ、其中石田治少御カヨイニテ、宗湛カ前ニ御馳走被成候事也、

秀吉は、お茶を点てながら、「多人数であるから、一服のお茶を三人宛で飲んでくれ、その順番は籤できめてくれ」と云って、小姓衆に長さ三寸、横一寸の板を人数分持ち出させた。大名衆は奪い合いながら札を選んだ。宗湛には特別に、「ソノツクシノ坊主ニハ四十石ノ茶ヲ、一服トツクリトノマセヨヤト」仰せられた。宗湛は利休の点前で四十石の茶を井戸茶碗にて頂き、更に新田肩衝茶入を手にとって賞翫することが許可された。

この茶会では、宗湛は一人特別扱いされていた。大名衆と同格、

いなそれ以上の殊遇を受け、感極まったようである。この時の感激は、秀吉への忠節心を揺るぎ無いものとすると同時に、茶の湯者としての自覚を強固なものとする事になった。

宗湛は数寄者の訪問と名物拝見には余念なく精を出し続け、堺衆の名物道具はすべて見つukしたと言える。宗湛の茶の湯への情熱は、次の一連の行動からも十分判断できる。

宗湛は堺に来てから連日の如く、朝・昼・夜と茶会に招かれ、名物道具の拝見に余念がなかったが、天正十五年正月十一日朝、郡山の羽柴美濃守の茶会に宗及と共に招かれていた。これが終わり、当日そのお礼にも参上し、池田伊予殿のところに立ち寄り、いろいろと話し込んでいるところに、堺の宗伝から飛脚が来て、書状が届けられた。

明日十二日朝、利休老ヨリ御茶可被進トノ御案内候ホトニ、早々堺ノ如(ママ)ク可被罷歸トノ到来ニ依テ、即時ニコシラへ、申刻コヨリ山ヲ出、九ツ時ニ堺着也、又則コシラヘテ、大坂ニハツ時分ニ着、利休路地ノ口ニ待、宗伝内意トシテ案内被申候へハ、則コノ方ヘトテ、外ノククリマテ、小姓衆ニアントンヲモタセ御出候ホト、夜不明ニハイ入候也、兩人乗物ハ間ヲ置テ、マタセ候也

郡山にいる宗湛は、宗伝から利休の茶会への案内が届けられると、即刻郡山を出立(午後四時頃)、夜十二時近くに堺に到着、直ちに準備を調べ、大坂に向かった。午前二時近くに利休の露地口に到着

した。宗湛の茶の湯への熱意がひしひしと伝わってくる記述である。宗湛は大変な筆まめであった。茶会の観察記録はすべて精細に記した。茶室の様子、床の飾り、軸の様子、道具の様子、その大きさ、釉薬の具合などなど、詳細に記録している。当座に規定で測ったり、メモしたわけでもないのに、墨蹟の行数や字数、文字や書体までも模しており、器物の寸法や姿などもかなり正確に記している。その記憶力には驚嘆せざるをえない。例えば、天正十四年十二月廿四日朝、隼人殿に宗湛ひとりが招かれた折の記録に眼を通せば、そのことが明らかとなる。

ニテウ半ニ床ナシ、ヨシ入ノ心ニ切疊半アリ、爰ニ始ヨリ蕪無ニ水バカリ入テ薄板ニスワル、マン中ニ、但前十六メアリ、手水ノ間ニ白梅入、イロリ 新アラレ釜、自在ツリ、センカウ茶碗ニ道具仕入テ、棗袋ニ入、ツルヘ メンツウ 引切  
(花入の様子が描かれ、「梅ノ枝中ノ方ニサシ カタフク、開タル花 一ハ水ニアリ」と記されている)

一 蕪無ハ、高七寸分半、口四寸七分、ノト一寸五分ホト、クダハ下ヨリ三寸五分也、上ノクタ一寸三分、間ハ三分、クダヨリ下三分、横二寸八分、底ニヤキ出タル朱ミユル、ソト黒キツクロイ有、大ベラノ方ニ被置候也、クダヲ前ニ也、

一 センカウ茶碗、口五寸ホト、高二寸三分、式ノ高二分ホト、外ニ筋一ツアリ、内ニ三ヶ月ノ如クニ、クホミ有、シキマテ薬力カラス、外ニカキメ七處ニアリ、内ニ雲ノヤウニカキメ

七ツアリ、茶置ハ一寸ホトクホシ、又内ニ筋ノ如クニカキメ二ツアリ、ナラヘテ、内ノチャジミ黄ニアリ、  
不明な部分もあるが、これ程正確にまた詳細に会記が書けるとは驚きである。

宗湛は相当の記憶力の持ち主であったようだ。このことは宗湛に限ったことではない。津田宗達・宗及を始め当時の茶人たちの記憶力には驚嘆させられる。

さて、『宗湛日記』にはかなり多くの数寄雑談が記されている。しかし「雑談数条あり」「雑談あり」「シハシ咄ソロテ」「朝ヨリ終日ノ御咄也」「御茶ノ後ニ、次ノ座敷ニテ御咄アリ」「御酒一返、ソレヨリ良久御咄ソロテ、振舞出也」「御振舞スキテ、種々、御雑談」「一スミアリ、咄有テ、薄茶一服ツツメサレウカト被仰テ、」などなど、雑談が行われたことは良く判るのであるが、実際にどのような「雑談」が行われたのか、その内容の判明しないものが多い。例えば天正十五年三月十八日の晩、宗湛は前日の朝会に招かれた後礼に天王寺屋道叱を訪れるが、その時の様子は、次のように記されている。

道叱老ニ御音信ニマイル、内ニヨヒ入テ、御茶被下也、日暮テ燈臺ニ火ヲトホシ、床ノ前ニ置、其後サカナ御酒アリ、又茶請出、一スミアリテ茶有、亥ノ刻マテ咄テ居也、其間、數奇ノ御雑談ノ數、廿六ヶ條也

多くの雑談がかなり具体的に行われたようであるが、その実態は

判らない。簡単な記述ながらその内容を推測することのできる雑談もある。「ナヤノ興太郎トノヨリ白袋到来トテ、四スクイ入候」「釜ハ二重釜也……コノ釜宗易御メキニテ、金子ニツニ御取候ト也、又始ノ主ニ蓋ハカリヲ銀子一枚ニ被取候ト也、此蓋カラカネ、ヨリイレ也」等など前後の記述からその内容を把握することができる。

大変興味深い記述がある。利休も津田宗及も亡くなった天正二十年十月晦日の朝、宗湛は博多の茶室に豊臣秀吉を招待した。

二テウ敷 床ニ一軸懸テ、大ヘラノ方ニ錦ノシトネヲ置、御ハ  
イ入ナサレテヨリ、床ノニシキノシトネヲ、ククリノモトニシ  
カセテ、被成 御座候、御膳ノ時ハ御相伴ハカツテノ方ニ御座  
候、ツリ棚ニハ高麗茶碗二道具仕入、棗置合テ、

一 御茶ノ時ハ如常 御座ニテ候、御機嫌能候テ、種々御雑談  
トモ被成候、此一軸ニ付テ、床ヲ仕替候ヘトノ 御誕有リ、此  
ヤナル指南ハ、宗易モ宗及モ云テハキカセマシイソト 御意  
也、忝ト申上候也、御膳ノ御カヨイハ休夢一人也、御相伴ハ有  
樂一人也、茶ノ時ニ休夢被召出候、カツテノ口マテ御出アリテ  
御咄アリ、

二畳敷の茶室で秀吉の雑談がいろいろと行われた。床の間に敷かれた錦の褥を躡口の近くに移し、それに座して機嫌よく雑談された。床に掛けられた一軸について、「このような軸を飾る場合には、軸に合せて床を造りなおさない」とのお言葉があった。「このよ  
うな教えは、利休も宗及も聞かせることはなかったであろう」との

仰せであった。利休も宗及も亡くなり、その名前もあまり口にされない時代のことである。彼らを偲びながらの言葉であったようだ。秀吉はこうした教えを得意顔で話されたのであろう。

細川三斎は、晩年、辻閑斎と松屋久重を前にして次のような雑談をしている。

三斎云、珠光ハ奈良ノ人ト云、奈良ニモ左様ニ云カ、久重コタ  
ヘ云、如御意ニ申候、屋敷ナトモ御座候、三斎云、尤数奇ノ皆  
本ハ奈良也、珠光出候故也、利休云シハ、何事も珠光イロイタ  
ル程ノ事ハ、ナヲサス能、カリソメニモ悪事無之候ヘハ、ナヲ  
シ可申様無之ト云ツル、名譽ナリ、柴山監物トハ太閤ノ咄ノ衆  
也、此柴山ニ、堺住吉一休寺ノ方丈ニ、

初祖菩提達磨大師

一休筆ニテ有之ヲ、佐久間甚九郎買求テ、柴山監物ニヤル也、  
是ハ珠光表具ト利休見出シタリ、誰カ加様之事可成、扱モ扱モ  
ト誉シ也、珠光ハ第一一休参人也、然所ニ長キ掛物ナレハ掛ラ  
レス候ヘハ、加毛飛驒・細川与一郎兩人ヲ、柴山頼テ云、利休  
ヘ表具ノ事可申候間、御取合頼候ト也、然ハ、有時ニ利休・飛  
驒・与一郎此三人ヘ芝山スキヨスル也、彼墨跡ヲ床天井ノ前ノ  
方ニ掛テ、天井ヲ廻シ、ナヨ竹ニテ角ヲ押入掛テ、下ニモ巻タ  
メテ置テ、柴山云、此掛物床ニカカル様ニ、利休ニ被成候テ被  
下候ヘト云、易答云、是ヲ誰カイロイ候事可成候哉トテ、終ニ  
同心無之候、柴山云、タトイ珠光成共、十二光ナリ共、御ナヲ

シ候テ、床ニ掛ル様ニ被成候而可被下候、竹ニテ押入候へハ、毎度壁モソコネ、如何ニシテモ掛ラレス候ト云、其時、兩人ノ相客云ク、アレ程ノ望ニ候間、御ナヲシ被成候へカシト云ハ、利休云、ソレハ何ト云事ソ、能物ヲ惡ナス事、我者不成候間、能キ物ヲ惡クナシ度ハ、ソナタ衆メサレヨ、其コトクニ能ヲ惡ナス事、我等ハエセス候トテ、サンサンニシカリ、機嫌候キ、惣別珠光イロイタル事ヲサワル事、努々不可有ト云ヘリテ、左候ハハ、床天井上ケ、高クシテ掛ラルヘクト云ヘリ、是ヨリ天下ノ床天井高ク成ソ、手柄成事トモナリ、此掛物、今ハ將軍様ニコレアリ、天下一ノ一休トハ此事也、(『松屋会記』)

今日では多くの者が、『松屋会記』『南方録』などを通して、秘蔵の名物掛物などを掛ける場合には、その長さに応じて床を造りなおすのが良い、という利休の教えを知っている。従って、現代の我々にとっては、秀吉の宗湛への教えがなにか間が抜けたことのように感じられる。こうした教えとは全く逆の指示も『茶道四祖伝書』にはみられる。

松屋久好は徐熙の鷺の絵を所持していたが、この名物が大変長い掛物であったので、床の天井を高くした。「是を利休御覧ジテ、床天井高く悪し、何とて高く仕たるぞと也。久好云、(シセン久政ノ鷺ヲ掛度コト) 風と御座候半かと存如此と申也。易聞給て其分別なれば弥悪く、(アルカカリニシテ) 不慮ニ一軸掛る事あらば巻ためて置て好し。自然のたくみハ不入ものなり。早々床天井を取りさげ

申せとなり」と利休は命じたという。

慶長二年二月二十四日の晩、宗湛は、博多の年寄衆柴田宗仁と道哲と共に施薬院全宗の茶会に招かれた。この時もいろいろと雑談が行われたようである。「アラレ釜ハ新、蓋銅、此蓋へ千貫文ト利休被仰候」と、利休の話が持ち出されている。又給仕について、「座敷ノカヨイハ、十七八ノ女房衆三人、衣裳一段ケッコウ出立テ也、薬院被仰ニハ、是ヲハ馳走ナリト御雑談也」と記している。女性が茶会に顔を出すことのない時代のことである。これと同じような逸話を『茶道望月集』も伝えている。

あるとき、利休は、当時の茶の湯巧者として知られた、親しい老茶人の三人を招いた。客が何心なく茶席に通ると、そこに十六歳ばかりの美少女が、内掛に美しい着物を身につけてすわっている。正客は、その少女になんの挨拶もせずに、道具の取合せを見、次客以下も同じようにして、三人とも本座についた。やがて利休が姿をあらわし、炭を直し、膳を持ち出して正客の前に据えたとき、正客は挨拶した後、少女に向かって、「利休老が膳の通いをするのはたいへんでしょうから、あなたが立って通いをなさい」と言った。少女は、「かしこまりました」と答えて、通いを勤めた。茶会がすんだ後の挨拶で、正客は、「今日の挨拶としては、このようにするよりほかはなかったものですから、失礼いたしました」と言うのと、利休は、「いやいや、そのとおりでしょう」とお答えなさった、という。



昔はこのようなことが度々あって、茶事の一興と、名人の方々が敢行したことである。しかし、こうした振る舞いを聞きかじり、駆け出しの茶人が生半可な気持ちで行うべきものではない。

給仕について、『山上宗二記』には次のように記されている。

大名とか、唐物道具を所持している数寄者は、稚児のように鬻を結った子供に袴だけをつけさせて、給仕に使う。また喝食を使ってもよい。このどちらかを用いるのである。家来である武士や若衆は使わない。つぎに十二、三歳の沙弥を給仕に使う。これは、貴人であろうと、普通の庶民であろうと、身分・地位の低い者であろうと、誰にでも似合う給仕である。これらのことは、利休からの伝授である。

『宗湛日記』に記された次の雑談は、「御雑談事」という項目のもとに、かなりまとまって記されている。

天正十五年正月十二日朝、宗湛は博多の宗傳と共に利休の茶会に招かれた。

フカ三疊半、四寸ノイロリ 五徳スヘ、釜アラレ、ウバノ口  
鬼面、床ノ向ノ柱ニ、高麗筒ニ白梅入テ、手水ノ間ニ取テ、床  
ハシタテノ大壺置テ網ニ入、次ノ間小棚ノ下ニ土水指、唐也、  
御茶尻フクラニ入、井戸茶碗ニ道具仕入テ、土水覆 引切

御雑談事

一 袋ニ入モノハ茶入ハカリ也、ツンキリナトモクルシカラズ、  
是茶ノ養性ニテ有ホトニ、其外何ニテモ不可入、

一 茶杓、古ハ小壺ノ茶杓ナトトテ、ソレソレニ仕合テアリ、  
今ハヨリタメニテモスクイ候、口ニ入サヘセハ也、

一 ナゲ頭巾ハ、珠光末期ニ、宗珠ニ是ニ無上ヲ入候ハテ、揃  
ハカリ入ヨト云テ死也、古ハ二貫文ホトノ物也、如此イヘル  
事ヒゲナリ、此小壺ヲナラヤノ又七ト云者、所持候ツルニ、  
彼雑談ヲ聞テ、ラウサイニテ死也、古ノ者ハヨカシキ也、

一 圓悟ノ文字ハ、一休ニ只モライテ、是ヲ珠光ノ表具セラル  
ト也、此光ハ一休和尚ノ法ノ弟子ニテ候間、只被進候也、今  
千貫文ニ宗易トラセラレ候トノ御雑談ナリ、

一 小茄子トハ、三ツ内ニテ、ソトホソメニ有トテ云也、ホソ  
キニアラス、

一 老茄子トハ、ヨイタル茄子ノ如ク、黄ナル葉アルニ依テ也、

一 古木ノ事、御雑談ノコト、

一 内赤ノ盆ハ、赤ハ雜(新)ナルココロ也、黒ハ古キココロ  
也、

一 網ノ子細ノ事、(道)叱仕付ニ依テ被仰也、

一 瓢箪ノ茶入ノ事

一 紹鷗ノ天目ノ事

大阪の深三疊台目の茶室である。一尺四寸の炉に五徳をすえて、  
姥口の霰釜(鬼面の鑢付)が掛けてあった。床柱(床の向こうの柱)  
には高麗筒が掛けられ、白梅が入れてあった。花入は中立のあいだ  
に取り去り、床には橋立の茶壺が網に入れられて飾られた。唐物の

水指（焼物）、茶人は尻ふくら、井戸茶碗、建水は焼物、蓋置は引切であった。

一尺四寸の炉に五徳を据えてとある。今日では当然のことのように思われるが、天正十五年頃ではまだ特記すべきことであった。それまでは一尺九寸、二尺などの大囲炉裏や、一尺七寸五分、一尺六寸など、その大きさは定まっていなかった。さまざま大きさの炉が切られ、釜は自在、つるべ、鑊（くさり）、ホソクサリなどで釣られており、五徳の使用は珍しいものであった。しかし天正十五年以降になると、利休の働きにより、徐々に利休流が普及し、炉の寸法は一尺四寸と定まり、「当世風」の大きさとなっていたのである。従って、天正十五年正月のこの茶会では、「一尺四寸の炉」はまだ特記すべきことであった。

床の間には、「床ノ向ノ柱ニ、高麗筒ニ白梅入テ」とある。利休は、三疊台目の床の間、正客から見て向こうの床柱に筒花入を掛けた。これは、宗湛の視線をこの花入に集中させるためである。

天正十三年正月晦日、利休はこの花入を既に津田宗及に見せている。宗及はその時に「かうらいものか 一筒 梅生而……」と記している。この高麗筒には、利休の妻宗恩手縫いによる袋（南蛮渡りの海気裂）が備わっている。

後座には、この花入に換えて橋立の茶壺が飾られた。この茶壺は利休愛用の葉茶壺であり、利休が最後まで手放そうとしなかった愛蔵の壺である。利休七哲の芝山監物・瀬田掃部たちでさえなかなか

見せて貰えなかった壺である。この貴重な茶壺を宗湛は拝見させて貰ったのである。宗湛が利休に会ったのはこの時で二度目である。宗湛がいかに厚遇され、特別扱いされていたかが判る。

山上宗二は、この橋立の茶壺について、次のように記している。

一 ハシタテ 宗易二在

此壺丹後ヨリ出候 丹後二過タル

名物トテハシタテト云旧説アリ

又東山殿此壺被召上時 文

ヲモミス先壺御覽被成シニ付テ

また文モ見すあまのはしたて

と云哥の心にてハシタテト

付タル説アリ 名人之一世

所持ノ壺ナレハ御茶之事并ニ

御壺ノナリ 土 葉何モ言語ヲ

絶シ候 七斤入壺也 猶口傳在之

（『山上宗二記』）

宗二は、「名人之一世所持ノ壺ナレハ……」と強調している。恐らく宗二は利休から直接、この「橋立」の壺は大変気に入っている、生涯所持するつもりだ、と聞いていたのであろう。

利休がこの葉茶壺を入手したのは、天正四年頃と思われる（天正四年、『天王寺屋会記』に「大壺アミヲカケテ」、同五年、『今井宗久茶湯日記抜書』に「橋立ノ大ツホ アミカケテ」と明記されてい

る)。この茶壺に寄せる利休の愛着の情は、絶大なものであった。

この茶壺は、丹後の国から出たものであるが、丹後には過ぎたる名所、天橋立に因んで、橋立という銘が付けられた、という旧説がある。また一説には、東山義政公がこの壺を召し上げられた時、添え文などに目を向けようとせず、先ず茶壺の方をご覧になられたので、小倉百人一首の歌、「大江山いく野の道の遠ければ、まだ文も見ず、天の橋立」になぞらえて、この壺を橋立と名付けた、と云われている。その伝来は、東山義政公から織田信長の手に渡り、それから利休の手に渡ったのである。『山上宗二記』の記事と、利休最晩年の手紙、「橋立文」と「横雲文」とを合わせて考察すると、利休の「橋立」茶壺に寄せる愛惜の念が如何に深いものであったかが判る。

天正十九年二月四日聚光院宛

此はし立の壺貴院へあつけ申候

御上さま御説にて候當はんの

参候共御わたしあるましく候……（「橋立文」）

二月五日聚光院宛

此つほあつけ申候われわれかはん

にて御さなく候ハハせん取ニ参候共

御わたしなさるましく候一日のつほ

三つその分にて御さ候……（「横雲文」）

茶器収集欲に取りつかれた豊臣秀吉による「橋立」壺の召し上げ

事件は、利休弾劾の罪科の一つに付け加えられたが、どんなことをしてでも「橋立」は絶対に手渡さないという利休の覚悟の程がひしひしと伝わってくる文面である。「橋立」を生涯死ぬまで人手に渡さないという利休の決意は、幾年たっても少しも衰えず、それどころか益々深まっていた。自分の生命に代えても守り通そうとするその覚悟の程は「橋立」への愛着もさることながら、秀吉への反抗心、理不尽な追求を加える秀吉への抵抗の現れでもあった。

さて、この茶席で利休が語った雑談はかなり具体的であり、その内容も大変興味深いものである。

先ず、仕服に入れるものは茶入ばかりである。褌類は仕服に入れないものであるが、頭切などは入れてもよい。これは茶を湿気から守り、茶の味をそのまま保持するからである。頭切というのは、円筒を輪切りにした形の茶入で、その蓋は、茶入の蓋のように軽く載せておくだけのものである。今日の金輪寺茶器のようなものである。従って仕服に入れることによって蓋がきっちりと締められるので、茶の保存に良いということなのであろう。

次の雑談は茶杓についてである。茶杓というものは、昔は小壺の茶杓などといって、道具に合わせてそれぞれに作ったものであるが、今は折撓の竹茶杓ですくうようになった。「茶入の口に入りさえすれば良いのだ」と云うのである。それぞれ茶入の大きさに合わせて作ったようである。大きい茶入には大きな茶杓、小さな茶入には小さな茶杓と、道具に合わせて作り変えたようである。『南方録』に

は、次のような逸話が記されている。

勢多ノ茶杓ハ十四目半ホドアリ、カモン作大ブリ多シ、惣而休ノ作ハ、茶入・茶碗ニ依テソレソレ相応スルヤウニケツラレシ、尤ノコト也、人ノ所望申ニモ、カヤウノ茶入ニ添置申タキト申入候ヘバ、満足ニテ其ママケツリテ被送……

瀬田掃部は利休七哲の一人であるが、豊目十五目（二十二・五センチほど）の大振りの茶碗を秘蔵していた。利休はその茶碗に「水海」という銘をつけ、更にその茶碗に合わせて茶杓を削り、「勢多」という銘をつけて贈った。それ以後掃部はこの茶杓を手本にして、比較的長い茶杓を削るようになった、と云われている。現在残っている掃部の茶杓は比較的長く、大振りのものである。利休の作る茶杓は、茶入・茶碗の大きさによってそれぞれにふさわしい大きさ・形に削られていたのである。

次の雑談は、投頭巾の肩衝茶入についてである。村田珠光は亡くなる間際に「この茶入には極上のお茶は入れないで、挽屑の茶（粗末なお茶）を入れて使いなさい」と、息子宗珠に言い置いて死んだ。この茶入の代金は、昔は二貫文ぐらいのものであった。このようにいったのは、この茶入が御物などに比肩されるような名物茶入でないことを卑下してのことであった。後に奈良屋又七という者がこの茶入を高額で買い取った。しかしこの遺言のことを聞いて、氣に病んで死んでしまった。昔の人は奇妙だなあ、という雑談である。

この肩衝茶入については山上宗二も利休から聞いており、また実

見しており、次のように伝えている。

この茶入は、村田珠光が所持していた投頭巾肩衝である。篋目が四つある。向こう側に一つ、それに上と下に、意識的に削ったと思える篋目が一文字にある。その篋目の間になだれ釉が色濃くできていて、全体の釉は濃い飴色である。珠光は最初新田肩衝を所持していたが、次に、現在津田宗及が所持している文琳茶入、さらにその後小茄子の茶入を所持した。珠光はこれらの茶入を取り替えては手放し、取り替えては手放ししていたが、最後に残ったのは、この投頭巾と彼の圓悟の墨蹟であった。この二つは、珠光が死去する時まで、彼の手許にあった。珠光は息子宗珠に、〈私の忌日には圓悟の墨蹟を床に掛け、投頭巾茶入に簸屑の茶を入れ、茶湯にして供えてくれ〉と遺言していた。だいたい投頭巾肩衝と檜柴肩衝が茶の湯の要となる茶入である。その他の茶入は、すべて単なる名物にすぎない。尚、これには口伝がある（『山上宗二記』）。

珠光の遺言は、自分の命日には圓悟の墨蹟を掛け、投頭巾茶入に粗末なお茶を入れ、そのお茶を使って茶を立て、供えてくれ、というものであった。つまり、珠光はそれが自分自身にはふさわしいことであると伝えるとともに、この茶入をいつまでも保持してもらいたかったのである。しかし、宗珠は父の意向に反して投頭巾も圓悟の墨蹟も売ってしまったのである。

奈良の茶人松屋久政は、万代屋で投頭巾肩衝を拝見した時、次の

ように記した。

弘治二年（一五五六）三月十七日 万代屋へ

……肩衝ハ葉コイカキ、アメノヤウ也、表ニモヨキ葉アリ、ヘラ四アリ、又ウスカキモアリ、高二寸九分半、ヨコ二寸三分余、口寸四分、ソコ一寸五分、マハリ七寸四分、フクラ一寸一分、口ノ高四分半アルト也……（『松屋会記』）。

その後、永禄十年（一五六七）万代屋で投頭巾肩衝を拝見した津田宗及は、詳細な記録を残した。

……なけつきん拝見申候、つはおよそ如此候歟、へら四ツ有、浦の方へら一段ゆかミ申候也、面のへらに、おしいれたるやうなるところ有也、土少白色也、一段こまかに覚申候、くすり黒候也、口のうちへも、くすりまはりたる也、かたにつくろい有、ひねりうすく候也、くすりこまか也、口立のひたる也、かたたれさかりたる也、上くすりと下くすりとのかい、上くすり白色なるところ有、かたにかたさかり有、いづれも惣別そさうに覚申候、口のすし一段ふとく候、ふた平つく也、うらきんはくにてたミ申候……（『宗及他会記』）。

この投頭巾肩衝茶入の伝来は、珠光から嗣子宗珠へ、更に奈良屋又七、万代屋弥三・了二、千利休、豊臣秀吉、徳川家康へと移行し、柳営御物として伝えられたが、明暦三年（一六五七）の江戸城大火で焼失したと伝えられている。

次の雑談は、すでに触れた圓悟の墨蹟についてである。

圓悟の墨蹟は珠光が一休宗純からただで貰って、表具したものである。珠光は一休に参禅した弟子であったからただで貰ったのである。最近、千貫文で私が買い取ったのだ。

この圓悟の墨蹟についても、山上宗二は「この一幅は、昔、村田珠光が一休宗純和尚から与えられた墨蹟である。墨蹟を茶掛けとして使用したのはこの時が最初である……この墨蹟に書かれている法語は、禅宗の眼目とも云うべきものである。なお、これには口伝がある」と伝えている。

村田珠光を佐び茶の開山と提唱したのは利休である。利休がいなかったなら、珠光の存在は薄れたままであったであろう。古田織部は「昔より今ニ珠光おらずバ数寄者無之。珠光名人という事（ヲ）利休以前ハ合点も難行処ニ、宗易出て一入珠光名上る也」と記している。村田珠光は室町時代の茶湯者であるが、一休宗純に参禅し修行したことは良く知られている。珠光は一休のもとで薫陶を受け、禅修行に励んだ。その結果印可の印として圓悟克勤の墨蹟を頂くことになった。この時の珠光と一休との精神的な絆は極めて強固なものであり、珠光の生涯を決定するものであった。

珠光はこの墨蹟を通して圓悟や一休に思いを馳せ、その行跡をたどり、禅の精神を深めていたのである。この墨蹟を使用したのが茶の湯で墨蹟を使用した最初であることは銘記しておく必要がある。

次の雑談は、小茄子についてである。「小茄子というのは三つの茄子茶入のうちの一つで、少し細めであるので小茄子と言われている」

る。細いからではない」と宗湛は伝えている。

茄子という名称が野菜の茄子（賀茂茄子）に似ていることから生じた名前であることは多くの者が知っている。『烏鼠集』や『喫茶雑話』では、「茄子・文林・丸壺ハ一段位高し、上臈也、袋に入れてほりたる盆にのする」「肩衝・大海ハ御供衆也」と興味深い譬えを挙げている。茄子には釉薬が深くかかり、ほとんど盆付までかかって地肌が見えない状態になっている。それに対し、肩衝や大海は釉薬が途中で留まり、地肌があらわになっていて、まるでお供衆が脛をあらわにして走りまわっているようだから、というのである。谷晃氏によれば、茄子を天子に、肩衝を將軍に譬えることもあったようである。

『茶湯図』（矢野環著『君台観左右帳記の総合研究』所収）には次のように記されている。

こなすひ、しゆくわうつほなり、これもたけ二寸同前なり、いかにもうつくしく見ゆる二よつてこなすひとつくるなり、是もうすかき上薬色也、是ハ口乃つくりいづれよりもましたるなすひハ、なりと口にきハマりけるなり、土ハ少あかきもあかミさしたる土なり。

利休が宗湛に語った小茄子は、珠光の小茄子のことである。この小茄子については山上宗二も利休からいろいろと聞いており、その詳細を次のように記している。

珠光の小茄子 織田信長公の最後の時にこれも焼失した。これ

は、間道の仕服に入り、四方盆に据えられている。この小茄子の茶入は、村田珠光が所持していたが、後に古市播磨守澄胤の手に渡り、次いで南都興福寺の尊行院に渡り、またその後長惣寺に渡った。それ以後三好実休に二千貫で売り渡された。実休が討ち死にした後、本願寺の坊官下間大藏法橋に三千貫の質物として渡った。法橋の死後、下間丹後が所持していた。丹後の死去の後、本願寺門跡に献上された。その後、武野宗瓦（紹鷗の嫡子）が本願寺から三千七百貫で買取り、所持していたが、やがて宗瓦から信長公へ献上された。

この茶入が小茄子と云われるのは、つくも茄子の茶入より少し小さかったからである。珠光がこの茶入一種を特に愛用していたので、名物と云われるようになり、また侘び茶の道具ともなったのである。

土も釉薬も天下無双と言える見事なもので、その形が一段と力強い感じの茶入である、と言われている。釉薬は色薬で、そのなだれた先端は蛇喝色（とかげ色）になっている。この茶入は、口造りと釉薬のなだれた先端とが特に見事である、ということである。これらのことは、師匠利休がよもやま話をされた折、詳しく聞いたことである。私（宗二）は、宗瓦とは仲が悪いので、この茶入をまだ拝見していない。

宗湛は「小茄子は三つの茄子茶入の一つ」と聞いていたようであるが、宗二は、「天下に四つの茄子の一つ」と聞いていた。つまり、

紹鷗茄子・似たり茄子（百貫茄子）・つくも茄子・珠光の小茄子の四つの茄子のことであった。

こうした茄子とは別に、老茄子という茶人が存在する。古くなった茄子のように黄色の釉葉がかかっていることから生じた名称である。『君台観左右帳記』には、老茄（ラウキヤ）という茶人が採り上げられている。これには「釉葉黄」と書き込まれているが、口が広く、甑はない。口辺から胴にかけて取っ手がついている。これは老茄子とは別種の茶人である。

次の雑談は「古木の事」についてである。宗湛は「古木ノ事、御雑談ノコト」と記しただけであるが、これは玉潤筆古木の絵のことである。枯れ木の絵（左絵）と対をなす右絵である。津田宗及はその拝見記を次のように記している。

古木絵拝見申候、梅也、右絵也、昏新候也、立絵也、下に地のやうなる所有、昏之下より三寸ハかり上よりかきいたしたる也、それより地のやうなる所有、えたのやうなるもの、少下江さかりたる也、木ゆかミ申候、すミにかたうす有、此絵、昏之内つまりたるやうに候、し（詩）やかて古木上ニかきたる也、七言之し也、しも則玉かん（礪）也、いん（印）し（詩）のかきたし（書出）の字之かた（肩）に有之、古木のね（根）のやうなるものミへ申候、ひうし、上下つつミおりのきんらん、こん地也、下はきんに見え申候、是ももん（文）はてうしからくさ（丁子唐草）也、中は白地からくさ也、一文字ふうたい……か

らくさ也、何もかな（金）地にてはなく候、露くれない（紅）……し（詩）、かミのまん中に有（『宗及他會記』）

次の雑談は、「内赤の盆は、赤色は雜（新）なる心を、黒色は古き心を現している」という盆の色彩を引き合いに出した話であるが、利休の色彩感覚を端的に表現した言葉として時々引用される。

利休は、ここでは赤色の盆になぞらえて秀吉の色彩感覚、美的感覚をほめかしているのである。秀吉の豪華絢爛の趣味、つまり派手好み（赤）と利休の究極の侘びの境地（黒色）との対立が示されているのである。

この雑談から三年半を経た、天正十八年九月十日、利休は聚楽屋敷の書院に大徳寺総見院の球主座と宗湛を迎え、台子で茶を点てた。その時の様子を宗湛は、台子の上には「黒茶碗ハカリ置……茶ノ時二、内ヨリ棗、袋二人持出テ、前二置テタテラルル、茶ノ後二、又内ヨリセト（瀬戸）茶ワン持出テ、台子ノ上ノ黒茶碗二取替ラルル、黒キニ茶タテ候事、上様御キライ候ホトニ、此分ニ仕候ト也」と記録している。

利休は秀吉が黒茶碗を嫌っていることを十分承知の上で台子の上に黒茶碗（黒楽茶碗）を飾って置き、懷石が済んでからその茶碗で濃茶を練った。その後改めて瀬戸茶碗を持ち出し、「上様キライ候ホトニ」とわざわざ断って瀬戸茶碗で茶を点てたのである。こうした言動や作意は秀吉を激怒させるに足る反逆行為であり、そのことを十分に意識した、利休の強烈な自己主張であった。この時の利休

は、秀吉の茶頭という職業を半ば放棄した佗び数寄者であったと言  
うことができる。

次の雑談は、瓢箪の茶入の事であるが、これについて宗湛は「瓢  
箪ノ事」と記しただけである。この茶入については、山上宗二が  
「九州豊後の太守大友宗麟が所持している。この茶入は、昔松本珠  
報が所持していた。小壺の茶入で、四方盆に据えられている」と記  
している。

次の雑談は、紹鷗の天目の事であるが、宗湛はこれについても  
「紹鷗ノ天目ノ事」と記すばかりで、どのような雑談が行われたの  
か判然としない。

山上宗二は「天目之事」として、次のように記している。

天目の事 武野紹鷗が所持していた一つ、白天目一つ、この二  
つの灰被天目は関白秀吉公が所持している。秀吉公は天下の三  
天目の内二つを所持している。鳥居引拙の天目は堺の油屋が所  
持している。これらは、いずれも灰被天目である……

灰被天目というのは、『君台観左右帳記』（十五世紀）では「上に  
ハ御用なき物にて候間、不及代候也」と冷たくあしらわれていた天  
目茶碗であるが、十六世紀に入り佗び茶の湯が数寄者の間に浸透す  
るにつれて珍重されるようになった茶碗である。これとは対照的に、  
「万疋・五千疋」と高値で評価された曜変・油滴・烏蓋・鑑蓋・玳  
皮蓋という建蓋は「代カロキ物」となり、価値観の転倒が生じるこ  
とになった。つまり美意識の転換がおこなわれたのである。

灰被天目は灰釉地の上に褐色・黒褐色の釉を施したもので、焼成  
後の釉調は灰を被ったような黒ずんだ釉面など、変化に富んだ色調  
を呈し、それが佗び茶人の美意識にかなうものとして称揚されるよ  
うになったのである。

さて、関白秀吉は天正十五年正月、宇喜多秀家を名代として、弟  
の秀長を十五万の将兵とともに九州遠征に先発させていたが、三月  
一日には、自ら十萬の軍勢を率いて九州に向かった。宗湛もまた三  
月末には京都を発ち、船で唐津に帰還した。

秀吉の遠征は、秋月種実が檣柴肩衝の茶入を献上して降伏したの  
を始め、大小名の降伏続出で、快進撃となった。四月二十四日、宗  
湛は肥後の八代の近くで石田三成に追いつき、二十六日には水俣で  
秀吉軍に追いつき、薩摩国に入り、二十八日には出水城の秀吉から  
召し出され、黄金の天目茶碗で茶を一服賜った。秀吉は、その後嶋  
津義久を降伏させ、六月三日には箱崎に帰還、宮崎八幡宮境内を陣  
所として戦後処理の陣頭指揮をとっていた。ほぼ一ヶ月間の博多滞  
在であったが、秀吉は随行了した利休や宗及と茶の湯を楽しむ、武將  
や博多の町人にも茶を振舞っていた。この頃秀吉は細川幽斎を丹後  
などに通じた当代随一の文化人であった。永島福太郎氏によれば、  
秀吉は「歌と茶の両数寄道の名人を参らせ、これにもその威風を  
示したのである」（『中世文化人の記録』）。

五月二十五日、朝風の程に箱崎に渡りて見るに、松原遙々つつ



きて、八幡宮は北面に向ひて立たり、戎定恵の三学の箱を、昔埋まれたる所に、印の松とて古木あり、立寄て、

そのかみに納めをきつる箱崎の、松こそ千代の印なりければ、博多見にまかりけるに、爰を袖の湊と里人の教えければ、

いざさらばともにぬらさむ旅衣、袖の湊の浪のまくらに

〔九州道の記〕

幽斎は秀吉が博多に帰還する以前に到着しており、大宰府や姪浜の生松原などを見物していたのである。

天正十五年六月十四日、博多に落ち着いた宗湛は、博多の町衆島井宗室、柴田宗仁と共に利休の昼会に招かれた。正客は宗湛、場所は箱崎燈籠堂である。

フカ三テウ、カヤフキ、カベモ青カヤ、新釜ウハクチ、カナ風爐、小板ナク、畳ノ上ニソノママ、上座ノ柱ニ高麗筒ニシノ花生テ、ヤクモノ花モ、御茶人備前肩衝ヲ白地ノ金ランノ袋ニ入、緒ツカリ紅也、利休被仰ニハ、此茶人ハホテイト申候、袋ハカリナホトニト有也

ヤキ茶碗ニ、ヨリタメ・筧・巾仕入テ、ツルヘ、メンツウ・引切入テ、此茶ハ、ハシタテ（橋立）ノ壺ヲヒカセ候ト被仰、利休御手前也

利休の茶室は茅葺きで、壁は青茅を張った俄か造りの深三畳である。銅の風炉を小板を敷かずの畳に直に置き、それに新品の姥口の

釜がかけられている。上座の柱に高麗筒の花入が掛けられ、篠花と益母草の花が活けてある。ヤキ茶碗（黒楽茶碗か）に折り撓めの竹茶杓・茶筌・茶巾を収め、釣瓶の水指、面桶の建水、竹の引切りの蓋置、茶入には橋立の壺の茶が入っている。

この茶入は、利休が博多で見出した備前焼の肩衝、利休の美意識にかなった茶入であった。当時茶入といえば、誰もが唐物を使用していた時代である。利休はこの備前の肩衝に白地に金欄の仕服を着せ、紅色の緒つがりで締めて席中に出した。

利休は「この茶入には布袋という銘をつけました。白地金欄の仕服ばかりが名物で、中味よりも袋に生命があるからです」と説明した。本来なら唐物茶入に唐物の仕服を着せるのであるが、無名の備前の茶入に白地金欄の唐物仕服を着せたのである。つまり、中国（後梁の頃）の布袋和尚は常に布袋を携えて遊歴していたことから、布袋和尚と呼ばれるようになったのであるが、本名は判らないままであった。備前の茶人も無名であり、中味よりも袋に生命がある、ということから布袋和尚に肖って布袋という銘をつけた、というのである。

宗湛は、この金欄の袋については何も記していないが、実は、この袋は宗湛が利休に贈ったものだったのである。春屋和尚は「布袋記」で次のように記している。

此茶人筑前博多にて利休取得、博多の神谷宗湛に袋所望す。宗湛古金欄を出し、博多にも如此切有間敷ぞと、利休へ送る、茶

入に過ぎたる袋なるから、利休かけさせて、布袋と号す（『大正名器鑑』）。

箱崎燈籠堂でのこの茶会は、茶人と仕服の披露を兼ねたものであったといふことができる。従つて、宗湛が島井宗室、柴田宗仁を差し置いて正客の座についていたのも理解できる。

近代の数寄者高橋箒庵は、大正九年五月十日、大阪平野町の上野精一郎でこの布袋の茶入を実見し、次のように記している。

口作拵り返しなく、半面濃赤、半面薄赤にて、甌際より轆轤目浅く廻り、胴少しく括れ、稍深き沈筋一線を繞れし、尻フックリと窄み底板起しにて、一面緋釉の中に黒き斑點を現はせり、口縁に於て小さき繕ひあり、肩廻りより茶入半面備前赤釉の光厚薄片身替りを為す、其境目に於て下より上りたる二筋の緋釉あり、景色面白き事言はん方なし……備前焼茶入中赤釉の変化此の如きは全く無類にして、茶入其物も固より殊勝なりと雖ども、其最も高名と為りたるは、幸に茶伯利休の一顧を得たるが為めなるべし（『大正名器鑑』）。

利休はこの茶入に長短二本の茶杓を添わせているが、現在次のような添書付が一通残っている。

筒に

布袋ノ茶杓 利休

右書付千宗旦也

背二

黒漆判

右書付千利休也

此茶匙二本とも宗易好ニテ布袋

之茶入ニ添候二本之茶杓也

（花押）

箱崎燈籠堂の茶会に続いて、利休に随伴した紹安（道安）も宗湛と宗仁を招いて茶会を催した。この時の茶室の屋根は茅葺き、壁は青松葉で張り巡らせた二畳半の侘びたものであった。こうした極侘びの茶室は、まさに一時的なものととして造られたのであるが、それが反つて利休の意向を進展させることになった。

六月十九日朝には、秀吉が宗湛と宗室を招いている。

御数寄屋三疊敷、エンナシ、二枚障子ニ上ニアケマト、六尺ノヨシ板有、此路次ノ入ハ、外ニククリヲハイ入テ、トヒ石アリ、箱松ノ下ニ手水鉢有、木ヲクリタル也、古シテコケムス、ヒシヤクハ上ニフセテ、此箱松の下マワリテ、数寄屋ノ前ニ古竹ニテ腰垣アリ、ソコニス戸ノハネキト有、夜ホノホノ明方ニ、ハコ松ヲ通り、ハネ戸マテ参候ヘバ、内ヨリ 関白様シヤウシ御アケナサレテ、ハイレヤト御コエタカニ御誂候也、イマダクラクシテ、座敷ノ内モ不見分、サテ上座ノヨシ板ニハ文字懸テ、ソノ前ニ桃尻ニエノコ草ヲ生テ、薄板ニスワル、風炉、御釜セメヒホ、手水ノ間ニ水指イモカシラ、サソロテ、内ヨリ被成御出テ、茶ヲノマウカト御誂候テ、シキ肩衝ヲ四方盆ニスヘ、

井戸茶碗ニ御道具入テ、水覆 カメノフタ、引切ニテ御手前也、御茶タテラレテ後ニ、此肩ツキヲ御手ニモタセラレテ、兩人ノモノヲオンソバニ被召寄、是ヲ見ヨ、此薬有ユエニ、鳴と云ソト御錠候也……

この数寄屋の結構も利休の指図によって生み出されたものであるうが、極めて侘びた風情を醸し出している。しかし「二枚障子ニ上ニアケマト」「閨白様シャウシアケナサレテ」とあるように、その茶室には躰口はなく、その出入口は貴人口であった。宗湛たちは秀吉からさきくに声を掛けられ、名物道具鳴肩衝を手にしたされ、釉薬の説明までして頂いた。感慨無量の茶会であった。

六月廿五日朝、宗湛は答礼として箱崎赤旗に秀吉を招いた。御相伴は、秀吉に呼ばれて博多に来ていた細川幽斎である。

二畳半、青カヤフキニ、カベ・ククリノ戸マテ青カヤ也、床一テウ カマチ大竹也、御相伴 長岡玄旨様也、風炉 古眞釜床ノ前フロサキニ、数台置テ、イセ天目新 文琳 水指ナクシテ茶ヲタテ申也、

床ニハニシキノシトネ敷テ、閨白様被成御座候テ、御膳御アカリ候、御茶ノ時ハ、下ニヨリサセラレテ、キコシメサルル也、御衣裳之事、上ニハ白アヤ御小袖、キリノ御紋、御カタキヌ袴カラチャ コマカタ、御脇差ハ、モツクワウツバノ黒ツクリ、フチハ金也、

次ノ間ニハ、宗及・休夢、其外ニハ宗及知音ノ大名衆三人御座

ソロテ、御膳ナト御肝煎候ナリ……

宗湛にとって、秀吉を正客、細川幽斎を相伴にしたこの茶会は緊張の連続であっただろう。秀吉には、床の間に錦のふとんを敷き、そこに座って頂いた。道具は宗湛の肝煎りのものを使用した。小寺休夢斎・津田宗及などが手伝いとして次の間で立ち働いていた。

「小姓ノ如ク候、忝ト申候事也」と記している。

その頃箱崎の陣営では大名たちが競って茶屋を設けていた、と云われている。従って、箱崎の松原には多くの茶屋が建ち並び、連日天空の松籟に和して茶の湯釜の発する松籟が鳴り響いていた。九州の諸大名は秀吉に従順し、博多の町衆も、島井宗室・神屋宗湛にならって秀吉に従っていた。博多の町も復興し、博多にも利休流の茶の湯が流行った。利休の存在は、当代随一の茶の湯者として知れ渡り、侘び茶の湯が一世を風靡し、「当世の風躰」になっていた。しかし翌年、天正十六年三月頃、豊後の大友義統の宿老、浦上長門入道道冊は、国元の若林中務入道道閑宛の書状で次のように述べている。

其許にてハ宗易の作に候竹之蓋置、又めんつう・つるへ・今焼茶碗、皆々すたり候由申候、聊も誠にハなく候、既 閨白様御沙汰候間、御推量可有候。

豊後では、それまで流行していた利休流の道具はもう廃れてしまったと風聞されていた。しかしそれは間違いで、京都・大阪・堺では依然として利休流の道具がつかわれている、しかも利休好みの道具

の使用は「関白様御沙汰」であった、と伝えている。利休流茶の湯の流布があまりにも急激であったために、博多町衆のあいだでこれをいさぎよしとせず、批判の声が上がっていたのであろう。

天正十五年十月十四日、晝、宗湛は津田宗及と共に秀吉から聚楽に招かれた。

座敷は床なしの二畳敷、躰口に志賀の大壺がおいである。関白様は勝手口にて膝をたてている。兩人は畏まって躰口の地面から壺を拝見する。壺が下げられてから、兩人は茶室に入った。「上様カツテノ口ヨリ被 仰二ハ、食ヲクワソウカト御申ソロ、忝ト申上ル也」。

この数寄屋は急に仰せ付けられて、三日に出来上がった。然らば十五日にお茶を下さるという意向であられたが、座敷も完成したものであるから、急遽十四日の晝に致します、ということになった。宗湛は十四日の朝、大徳寺の古溪和尚の所に行き、明朝は、上様から御茶が戴けます、などと話をしている処に、宗及の使いで小姓が呼びに来た。早速もどり、宿で仕度をして、お城へ参上した。上様の前で宗及が云うには、「此座敷ハ三日ニ出来申候、御座敷始ニ先宗湛ニ御茶被下候事、忝御事ト御取合候ト也、是ヲツクシ（筑紫）ニテ人々ニ語り聞セ候ヘト、御前ニテ被仰候也」。

更にこの奥の松原に御茶屋があり、同朋衆が一人おり、長閑炉裏には一方に煤けた鍾子が掛かり、一方には田楽豆腐が二つ刺してあった。古い板の上には藁作りの円座があり、その上に二つ重ねの柿が三ヶ所に置いてあった。その脇の壁には藁草履が二足あり、「是ハ

銭五文ツツニ被賣候」と書かれてあった。宗及・宗湛兩人共、二足を十文で買い、円座を潜りの所まで持ち寄り、その上に足袋を脱いで席に入った。「ツクシノ者（宗湛）ニ一シテミセヨトノ、御詫候也」。

同十月二十一日晝にも宗湛は秀吉から招かれ、大阪城でお茶を戴いている。

宗湛が二畳敷の茶席に入ると、秀吉が「何処かで昼飯を食ったか」と尋ねられた。「宗及のところまで頂戴いたしました」というと、「それでは茶ばかりを飲ませよう」と仰せられた。長そりの花入に薄板を添えて持ち出し、床に置き、「博多の者に花を入れさせよう」と仰せられた。傍にいた宗及がいろいろと断りの言葉を申し上げたので、「それでは自分が入れて見せよう」と仰せられた。勝手から網代の塵取に小車の花を入れて、同朋衆が持参すると、その花を一本さっと入れられた。それから雑談がいろいろとおこなわれた。「始ヨリ 御機嫌能御雑談被 仰懸ナンドソロテ……上様・宗及・宗湛三人終日罷居候」。

秀吉がこれ程までに宗湛を特別扱いしているのは、既に触れたように、大陸遠征を実現するためには、どうしても博多を前線基地として獲得しておく必要があったからである。

大阪城でお茶を戴いた翌日、宗湛は木村屋宗二に招かれた。ここでは佐保姫の大壺を拝見した。

一 サホヒメ大壺ハ、七斤餘入ト也、肩ナデ、ドウハル、乳ノ

内一ツ次付候カトミユル、土赤メニ、ソト白ケタリ、土ノ心ハヨシ、上葉ハ薄ク、シラリト青メ也、一方ニ三寸ホトノツホスリ有（コノマワリニ葉コクタマル）、一方ニ四五寸ホトニベツサリト押入タルヤウニ有、ソノ下ニナタレ十四五アリ、二ツハ底マテ懸ル、ソノ下ニヨココブアリ、底ニさは姫ト相阿ノ判有、カナニ、又左ノ方ニソロテ、さわひめト其上ニ能阿ノ判アリ、口ノ高一寸ホトニ、但下シムル、ロクロ三ツ、アサヤカ二段々ニ候、遠山アリ、アサヤカ也、常ノ壺ニナリモ替ル也、又蓋ノ内ニさはひめト有、是ハ宗及書付候ト也、宇治森所ニテ也、

一 覆モエキ金ラン、裏アサキ、シメ緒紅也

一 サホヒメトハ、春マテ一段茶ヨキト申トノ説也、又、茶ノ色春霞ノヤウニ、ソト白ラケテ立ヤウナルト申ス説アリ、是ニ説ナリ、

佐保姫の茶壺については、宗湛も「是ハ宗及書付候」と記しているように、既に、津田宗及が、天正十一年正月二十六日、晝、錢屋宗訥の所で拝見し、その拝見記を次のように記している。

さわひめ大壺見候、 川なへ右衛門尉

大壺ノナリ一段能候、ころ大かた也、七斤可入候、土ヨシ、葉ケクミ候、松嶋ナトノヤウナル土也、葉ハウツラメ（鶉目）ナル所アリ、壺ノ前ウシロ葉色チカイ候、ハラニヨシコミタルヤウナル所アリ、ナタレ有、十筋モアリ、クチノツクリヨシ、十王カシラニアリ、ウケクチ也、ロクロ三筋、乳壺ツツクロイ

（繕）アリ、此壺ノ第一能トコロ、土与ナリ与也、土ノウスキコトスコシナン也、壺アタラシク見へ候、葉色黄白ケタルナリ、是モ十分ニハナシ、壺ノソコニさはひめと書タル字有、さは姫と書タリ、ヒメトイフ字ヲモシ（文字）ニカキタル下ニ相阿弥カ判アリ、サワヒメト二所ニ書タルナリ、判モ二ツアリ、一ツノ判ハ古キ判也、ロクワウイン（鹿苑院）ノ御判カ、京極道督判カト見申候、壺ノソコハリテ、ツシリトキタルヤウニミヘ候（『宗及他会記』）

『山上宗二記』では、沢姫を関白様が所持しているとして、次のように記している。

この茶壺には葉茶が七斤半入る。形は胴の部分が張っていて、大変珍しい壺である。背にえくぼのような窪みがある。土・釉葉、それにこの壺の保存する葉茶の味もすばらしく、申し分がない。関白秀吉公に森武蔵守長可が進上した壺である。

天正十八年十月廿日昼、宗湛一人が利休の聚楽屋敷に招かれた。二畳敷の囲炉裏には、貫付が松毬の雲龍釜が掛けられていた。御座では、床に橋立の茶壺が飾られた。紺色の網に入れられ、緒は唐結びにされていた。濃い茶の後、網を外し、床の前に投げ転がして拝見させた。この橋立の茶壺は、利休が最後まで愛用し続けた貴重なものである。この時、利休は次のような雑談をした。

肩衝ノ上ニ茶杓置候事、光ノ仕出候、ナケ頭巾ヨリ始ナリ、同緒ヲ短クムスヒ候事、ナケツキンヨリ、此仕付イツレモ珠光ノ

仕出候也、

村田珠光が投頭巾茶入の上に茶杓を置いたことから、肩衝茶入の上には茶杓が置かれるようになった。又、仕服の緒を短くしたのもこの投頭巾茶入から始まったことである、と利休は宗湛に教えている。

宗湛の茶会記は、天正十九年、二十年と続き、文禄年間を経て、慶長十八年五月まで続くが、数寄雑談が特記された茶会は殆どない。相変わらず、徳川家康・高山右近・小早川隆景・寺澤廣高・石田三成などの諸大名や武士衆との茶の湯三昧の日々を送っている。その記載事項は日付・場所・氏名だけを列挙した簡単なものが目立つようになり、茶会の雰囲気も利休時代と大分違ったものとなっている。付帯事項を幾つか列挙しておこう。

「先時絵ノ重箱ニ餅入テ出、其後ウス茶アリ、御咄有テ、其後ニ湯麦出、御酒一返、ソレヨリ良久御咄ソロテ、振舞出也……」  
「御膳七五三也、御酒ノ後ニ湯出、ヤガテ土器盃出、其後、ゴダンニ小折敷麦也……御酒一返目ニハ、吸物出、ソノ後、一返メニ肴出也、ヤガテ御ハヤシ有、大鼓春一、小鼓杉太」……  
其外七八人被召出、乱舞」「御膳七五三、クキヤウ・盃台数々終日乱酒」「御食過テ、御能アリ、五番、……芝居、御座敷ドットホウビ也、御能過テヨリ、夜更マテ乱酒也」「後ニ能五番アリ、山玄ヨリ錢三十貫文、能衆ニ」……其後乱舞、大酒アリ、

……其外ニモ被召出酒遣候也」「酒モブタタウ（葡萄酒）トモニ、五イロ出也、長崎ヨリノタウライ（到来）ト被仰也」「御ツボネ様其外女房衆五人、此外ハ次ノ間ニ候」「終日御遊、ハヤシ、大酒アリ」「御酒ノトキ、鶴新右……罷出、キヤウゲン」「博多ノ松はやし仕、懸御目候ヘト御意ニテ、福神えひす正月ノ如ク仕立テ、御城ニテ懸ケ御目ニ候、御振舞過テヨリ也、御キケンヨクテ錢五十貫文被下候也」「御茶マテハ数奇屋也、相伴ニ宗湛・宗室兩人、其後書院ニテ、ワカサ太夫ニ能五番ト被仰付候、脇ニクレハ也……二番ニ忠則仕テ、ソノ仕舞ヲハ、玄ノ前ニヨリテ置也……前日ニ太夫ニ引手物トシテ、銀子十枚・小袖、其外ニソレソレニ定被置候ヘトモ、無祝玄ノ能トテ、氣チカイテ、米二石ノ折帑ニナル也、ヨカシキトノ事也」

まるで侘茶以前の『喫茶往来』『淋汗茶湯』の時代に戻ったような雰囲気を感じられる茶会である。大小名たちの遊興として行われた武家茶道が展開されていた時代である。

### 『松屋会記』

松屋会記は、奈良の塗師屋（漆屋）源三郎久政・源三郎久好・源三郎久重の松屋三代にわたる茶会記である。久政の会記は天文二年（一五三三）三月二十日から始まり慶長元年（一五九六）七月二日、善二郎殿の会で終わる。久好の会記は天正十四年（一五八六）四月

十九日朝、堺の草部屋道説の会から始まり、寛永三年（一六二六）十一月十五日中坊長兵衛の会で終っている。久重の会は慶長九年（二六〇四）四月二十二日、金春八郎の会から慶安三年（一六五〇）正月十一日晚、中坊長兵衛の会で終っている。

『松屋会記』は、他会記のみで自会記は記されていないが、利休時代、織部時代・遠州時代へと続く約百二十年間に亘る茶の湯の歴史であり、茶人たちの生の記録である。

天文二年といえば、まだ茶の湯の揺籃期である。「久政茶会記」は、源三郎久政が東大寺四聖坊から招かれた茶会から始まり、慶長元年七月二日、善二郎殿の会で終わっている。「久政茶会記」には特記すべき雑談はあまりないが、天文十一年卯月三日から九日まで茶湯行脚ともいえる茶会の様子が記されている。これは、堺の名物道具を一挙に拝見しようという試みである。当然堺衆との交渉の結果行われた茶会である。

四月三日、武野紹鷗の茶会から始まる。久政の連客はハチャ五郎と少清である。紹鷗は名物道具を四十種以上所持した茶人である。

宵二宿へ預御使、波ト松島ト両種之内、コノミ次第、御飾アルヘキト也、又五郎ハツホヲ望、久政ハ絵ヲ望、終二不究候ニ付、イツレ成とも思召次第、可忝候ト返事申もの也、然ハ機嫌能ク両種出候也

茶会の前日、久政・又五郎・少清の泊まっている宿に武野紹鷗からの使いの者が訪れた。玉潤の「波の絵」と「松嶋の茶壺」の両種

のうちどちらを所望するのか問い合わせに来たのである。又五郎は「松嶋の茶壺」を、久政は「波の絵」を見たいと主張したが、決まらず、使いの者にはどちらでも結構です、と返事をした。しかし、当日には、床に「波の絵」が掛けられ、円座肩衝、台天目でお茶が点てられた。それが過ぎてから、「松嶋の茶壺」が出された。

四日、津田宗及の父天王寺屋宗達の所で、

手水ノ間ニ、盆ヲロシテ、船子ノ画カカル、牧溪筆、賛虚堂、上下金地、中萌黄、一文字・風帯紅

五日、満田盛秀の所で、

玉潤の夕照ノ画、坤寧殿茶碗、刻六ツアリ、青磁也、楊貴妃ウガイ茶碗ト云

六日、油屋浄言の所で、

耀変天目と柑子口柄杓指七日、薩摩屋宗忻の所で、

珠光茶碗、七種の菓子ノ絵、上下白地唐草、中香、一文字紺地、金地唐草、

八日、妙印道安の所で、

床ニ香炉、立布袋香合、九日、北向道陳の所で、

床ニ牧溪の煙寺晚鐘の絵、小軸、信楽水指、松花大壺、網ニ入テ出ル、ヲライ緞子、

奈良の久政たちは、このように連日の茶会巡りで、堺の名物道具

を拝見して回ったのである。こうした茶会巡りのことは、今日でも数寄雑談として活用できる。

「久好茶会記」も「久好茶会記」も数寄雑談をあまり記していないが、天正十七年十二月八日朝、久好が仏師屋春藤とともに帶屋宗栖の茶会に招かれた時に聞いた雑談は、当時の町衆の剛毅な精神とその心意気を伝えてくれると同時に、町衆の自由奔放な生き方、何か文化的なものを創造しようとする心意気を彷彿とさせてくれる咄である。

暁七ツ時分ニ、客ハヤ行テ、戸ヲタタキ、案内ヲ云處ニ、下女帶ヲ手ニ持ナカラ出相、是ハ夜中トテ、終ニ聞不入、高声ニ成リ候處ヲ、折節、中坊源五郎殿御通候而、コノ喧嘩ハ何事ソトトカメ給候也、今朝ノ数寄ニ参候所ニ、亭主ネホレ申候而、呼入ニ迷惑仕候ト申也、源五郎能々御聞候テ、是ハ客衆尤也、亭主ニ早ク是ヘ出候ヘ、批判アルヘキト御仰アリ、亭主ハ出兼テ、誠無正体事共也、一笑々々、右ハ宵ニ御咄之砌、必々暁参候ヘ、定テネホレ候ハン間、其時分ニ御通り合ソロテ、御批判可有候トテ、堅宵ヨリ御約束ニ、如此也、亭主迷惑是非限ナキ事共也、夜も明けやらぬ午前四時頃のこと、奈良の町に騒動が持ち上がった。数人の町衆がある家の表戸を叩いている。寝ぼけ眼の下女が帯を手にしたまま顔を出した。町衆と下女とのやり取りが声高になってきた時、その近くを通り掛った奈良の代官井上源五郎が何事が起ったのかとその事情を聞いてみると、この屋の亭主と今朝茶の湯の約

束がしてあった。しかし来てみると表戸は堅く閉ざされ、茶の湯の行われる様子はまるでない。そこで下女に問い詰めているところである、という。代官は、「それは亭主が悪い、亭主をこれへ呼んできなさい。問いただしてやろう」と云った。亭主はただおろおろするばかりであった。

この咄は、松屋久好が帶屋宗栖の茶会で聞いた雑談であるが、この咄には裏がある。つまり、この出来事の前夜、宗栖と井上源五郎らは悪戯心から、明朝早く茶の湯に招かれたとして行けば、亭主は寝ぼけ顔でおろおろするだろう。その騒ぎの最中に代官源五郎が通りかかり、亭主の油を絞ってやろう、という宗栖らの悪巧みであった。

この雑談を聞いた久好は、「亭主迷惑是非限ナキ事共也」と、亭主に同情的な気持を示している。

「久好茶会記」に続いて「久重茶会記」が始まる。久重の茶会記は、他に類が無いほど詳密に記されている。特に細川三齋と小堀遠州に招かれた茶の湯の記録は、詳細を極め、数寄雑談もたっぷりと記されている。

慶長十三年二月二十五日、松屋久重は京都の少庵の茶席に招かれた。その時の点前の様子を茶席の図面を記しながら、詳述している。その後書院に移り、さまざまな雑談が行われたようである。

……後ニ書院ニテ、色々ノ物語共有、最前ノ丸壺袋ハ、宗伍ノ香呂ノ袋ニテアリツルト物語ナリ、カウシシマノ切也、丸壺ハ



観音院ヨリ参り候壺ナレハ、委シルスニ不及候へ共、……

右ノ座敷モ、利休へ 太閤様御成候時ノ座敷ノ図ト御語り候也袋に入れ、光明朱盆に載せて軸脇に飾られていた丸壺は、東大寺の塔頭観音院で所持していたものである。この丸壺の仕服は、京の茶人十四屋宗伍が所持していた香炉の袋である。格子縞の切地である……。少庵のこの三疊台目の座敷は、利休が太閤秀吉様を迎えられた時のものである、と語られたという。

久重は、翌年五月十三日にも少庵に招かれ、茶を戴いているが、その時にも、「茶入茄子、有楽御ヤカセ被成、此頃被下候ト物語也」と記している。

寛永十四年十月五日、久重は辻七右衛門・京都誓願寺の永玉・守顯と共に細川三齋に招かれた。久重は当日の様子を、図面入りで克明に記録している。

「ヲモテ迄迎ニ御出ニ被成候、路地ハ縁ツタイナリ、大雨ニ付、前後ヌレ縁へ不出之様也……」と始まり、蹲や部屋の様子を図面に記し、部屋の造り、床柱、釣棚の様子を詳細に記録し、床の掛物「徳光禪師カネ渡シ墨跡」(平重盛が宋へ黄金を贈った返礼として贈られたもの、黄金渡し墨跡と云われている)とその表具のことを明記している。開山阿弥陀堂釜については、蓋とともに図面を描き、その説明をしている。「但釜ノトウニ少ヒツミ在之也、中柱ニ羽等掛テ有候、中柱ノ前ニ、利休ノネフト香入アリ、サハリノヤウナルカネ也、少モ文ナシ、利休ヨリ寺澤志广守へ、又志广守ヨリ三齋へ

ユイモツニキタルト御物語有候、此香入、久々執心アリシト也」。

これは当日の最初の雑談であるが、炭点前の最中に行われたものである。炭点前の様子は詳細に記述されており、その一挙一動が目に見えるようである。

タキ物入員ナリ、後陽成院殿御筆トテ御見セ候、貝ノ内金ナリ、コネタルタキモノナリ、焼物御タキ候テカラ、此貝ハ勝手二入、又右ノ根太取出シ、伽羅二切、イカニモイカニモイキヤカニ、炭ノ上ニ御置候、伽羅ノ大キサモ、厚サモ一分判程カトナリ、根太ニ一ハイ伽羅入テアリ、次ニ根太拝見

この時に後陽成天皇御筆の炷物入員や根太香合に関する雑談が行われたことは間違いないが、それについての記述はない。

中立の間に床の掛物を巻き上げ、カネノ花入(唐人笠ト云ノカ)を床壁に掛け、水仙を入れて、後座に入った。花入と座敷の飾りは絵図面で示されている。そこに示された水指は、「芋頭南蛮物、トモ蓋也、蓋ノツクハ、ズイキノカブヲ切タルコトク也、大徳寺ヨリ出テ、御取候由、前ハ堺住吉屋宗無持タルト御語候」。この雑談も点前の最中に行われたものであるが、その点前の様子は、まるで眼前で行われているかのように詳細に記されている。

濃茶・薄茶が終わり、後炭となる。

一次ニ、迎ノ儀ニ御炭ト望ハ、目悪候か、炭斗ノ炭次替テ出セトテ、又前ノ炭斗出申候、茶堂ニ釜上サセテ、半田ヲ出シ、火トコ御取候、大火一ツ残シ置テ、是ヲ押多キ、炭御置候、灰

ナカホトコホレ候モ、少モ不驚候、此時御物語ニ、今 將軍様、火トコ御取被成、晝へ火ヲ御取ヲトシ候テモ、御カマイ不被成、御相伴衆難儀ヲセラレ候ト御語り候也……桑火箸利休也、常ノヨリカネフトシ、エノサキホソシ、タケナカシ、今浮世ニ遣候ハ、利休ノ風炉箸也、取チカヘテ炬ニ遣候ト御申候……

一 炭斗フクヘ 名ヲスマウトリト御付候、是ハ古織部ヨリ手フクヘヲ呉候、見事ナレ共、炭出入不成候間、手ヲ取テ、スマウトリト付タリ、手ヲトルハ、スマウトリト云義也、

春慶焼ト御申候、イカニモイカニモ薬カワキ、フユカンノヤウ也、覆輪の如クニ、アメ薬アル也、信長殿フタン茶ワン也、一乱ニウセテ、壁ヤヒロイテ置ルヲ、御取候ト御物カタリ也、扱々、春慶ニ加様ノ手モ後座候カト云ハ、サレハ春慶ト云ヨト、ヤワラカニ被仰候也

一 茶杓利休也、名ハ命トモト御付候也、有時、三公、茶杓ヲ取出シ、サキヲ切テ、易へ御見セ候へハ、則易御ナヲシ候而、シタキリ雀ト名ヲ付テ、終ニ不被返候間、然者、此かへニ、其方ノ御持用ヲ取可申トテ、取タル茶杓ナレハ、命トモトハ付ルソ、節前へヨリ、大フリナリ、コレノ片身カワリフリ也、此シタキリ雀ハ、今 上様ニ在之、天下一ノ茶杓也ト御物語リ也、

一 柄杓ハ、易ニ声阿弥指アリツル也、ジゴク指抜指也、是ヲ一阿弥ニ写サセタリ、エヲ指時、易、御コノミアルヘキト約束ニ付、則エヲ指時、易御出有之テ、コレハカワ少長キト云へリ、

一 アミ一切不受候、クラヘテ見レハ、アツ紙程カワ高シ、一アミクタヒレ、如何様共御コノミ次第ト云ツル也、今ノ柄杓ヨリカワ少高ク大キ也、エノシシヨキ、丸味ハコレノ正林指ニ似タリ、久重手ニ渡シ、御見セ被成候間、兎角ノ義ハ申上ラレス候、加様ニ、アタラ數持タサセラレ候ハ、奇特成事ト申セハ、ソノ事持様有候ヨ、太閤タウフクヲハン内ニ被下ルニ、此タウフクノ緒、終ニソコネス候、皆人希特ト云、ソコネス様ヲ習可申ト、加宅飛驒云、ハン内答云、緒ラムスハヌ秘事也、タウフクハキネハ不成候儘、打カケテ、ヒホラムスハネハ、ソコネヌト云シ也、此柄杓ハ、不遣ニ置候へハ、加様ニアタラ數ト御物語リ也、水瓢、サハリノ様成カネニテ、此ナリ也、易ト兩人町アリキニ、此水下ヲ易買テ、三公ノ小者ニ持セラルルヲ取テ、終ニ不返候へハ、又ウメカネヲ二所ニシテ給候御語り候、ウメカネ五六ツ程ツツニツアリ、

一 薄茶入出候へハ、七右衛門殿問云、此茶入名ヲ何ト申候哉、三公答云、是ハフフキト御申候、此ナリハ、三公様形ヲ御切被成候ト世上ニ申候ト、七右殿御問候へハ、イヤイヤ是モ、利休形ヲ切出シ、一番ニ我等写候ニヨリ、世上ニ左様ニ云カト御申候、

一 山井ノ由来ハ、金森出雲守物語ニ、飛驒ノ國中ヲ、小ツホヲ狩テ、取ヨセミレハ、抑見事ナル瀬度肩衝有之ヲ、取テ秘藏申候ト咄有之、此茶入今ノ越中殿ニテ有之、名ヲハ出雲肩衝ト

云也、

一 右ノ咄、尤ノ義トテ、豊前一国ヲ小靈狩スレハ、長持ナト  
ニ入テ持来ル也、其トキ、家中ノ松井佐渡云、我等モ上々ノツ  
ホ持申候、拙者ノ内ニイナズト申ス鉄砲ノ者、丹波ノ龜山ニテ  
湯ヲモライテ吞候ヘハ、夫婦住ケル家ニ、ツホニコガシヲ入、  
コガシアリキテ吞候ヲ、イナズ是ヲ見テ、此靈ヲ申受度ト云ハ、  
安事、進上可申ト云ナリ、イナズ満足申候、代ハト問ハ、代ハ  
不及候、代ハ取間敷候ト云、代イヤナラハ、靈モライ事モ不成  
候ト云ハ、代程ノ物ニテモ無之、有無ニ代ハイヤト云、腰ニ錢  
ヲ付テ居申候テ有程、御取候ヘトイヘトモ、イヤト云テ、声高  
ニ成テ、町衆出合、是ハ、何事ソト尋ハ、右ノ子細ナリ、是ハ  
不苦喧嘩也、アツカイ可申トテ、腰ニ有錢ヲ有ノ儘御ヤリ候ハ  
んとハ尤ノ事也、御取候ヘトテ、ヨミテ見レハ、七十文有之、  
一段能比トテ、七十文ヤラセテ、町衆相済シタルツホナリ、是  
ヲ持參仕候ハハ、笑物ニ成候はん間、出シ不申候ト佐渡守云ハ、  
忠興ヨリ、ソレヲ是非共出シ候ヘトテ、持參被申候ヘハ、扱々  
見事ト御ホメ候ヘハ、中々ヌカレ申間敷候、吉モ惡モ能存候間  
トイフテ、少モセウイン不被申候ヘハ、其時、忠興云ク、我等  
ノ能ヲ不知候ニテハ無之候ヘ共、古織部ノ申事ヲハ、浮世ノ人  
セウインスル間トテ、古織ヘ御見セ候ヘハ、天下一トホメタリ、  
則蓋袋古織ニ被仰付候者也、此時、佐渡守云、勿論、能ト存候  
ト内々申候ツルニ、誠ノ台点ハ其節シケルソ、又佐渡果候トキ、

イナズヲイ腹ヲ切也、色々御留候ヘ共不聞候、兎角御恩ノ段ハ  
御伴申送り申候上ハ、御意ニテモ聞申事ハ不成候ト云、其恩ハ  
ト御問ヘハ、未練ハ何方ニ置タルソト御申候ツル、御恩トテ、  
終ニ腹ヲ切候也、此茶人、名ヲ人生ト付ル也、人生七十古稀ト  
云古事ニテ付タルトモ、今ハ山井ト云ソ、

浅くともよしや又汲む人もあらし

われにことたる山の井の水

此歌ニテ御付候ト御物語被成候、くむ我にことたると云心、

一 唐ヲ不持ニ、瀬渡斗秘藏シテモ如何ニ候間、唐ヲ持、唐ヨ  
リモ秘藏スレハ能候間、古織ニ生高（茶人）ヲモライ候ヘハ、  
金子二千枚被下候ハハ、進上可申ト返事也、今迄ハ二千枚ノユ  
キニ終ニ不聞ト御申候ヘハ、金ヲ千枚ト山ノ井ヲ千枚ニ被下候  
ヘトノ事ナレハ、是ハ不聞候、生高肩衝ノ所望モ、山ノ井ノ為  
ナルニ、ソレハ不成事ト御申候由、色々御物語有也、  
一 先年、奈良ヘ御越ニ、久好茶ヲ參候御物語共、掛物ノ外題  
ニ色々六ヶ敷事共ヲシカケラレテ、難儀アソハシ候ナト、色々  
御咄シ有候、

一 利休表具ト云事モ、鷺ノ絵ヨリヲコリタル事ナルソト、委  
ク永玉ニ御語り候也、

一 久好コロノカミ面白カリシト也、此時七右殿云、源三所ニ、  
珠光舟ノ釘、又利休竹釘持候ト咄候得ハ、三公云、扱々、珠光  
舟ノ釘ハ、ドコモトニ有候ソト被仰候間、床天井ニ三折御座候

ト云タリ、……

一 利休云ツルハ、亭主相伴セネハ、サワカシクテ悪キト云ケルト御物語候也、

一 給仕ハカフロ兩人、亭主ノ不謂事ナレ共、ケフノ様

ニ、料理ノシニクキ事ハナキソ、精進ト魚ト鳥ト三色ナルソ、……

一 何ニモクキニクキ物ヲ残シ候ヘ、不苦候ソ、易ノ時ハ、菜

モ一ツ・二ツノ様成事故ニ、皆クイ候ト云ソ、今ハ数多候ヘハ、

皆食候ト云事ハ不成候、出来タル事也ト御申候、……

大変長い間雑談が行われていたようである。解り難い部分もあるので、要約しておこう。

細川三斎は、後炭の折、畳の上に蒔灰をかなりこぼしてしまつたが、そのことにはお構いなく、將軍さまが炭点前をしたとき炭火を畳に取り落してしまつたが、將軍さまは少しも氣になさらなかったで、相伴衆が大変な難儀をされたことを話して聞かせた。それに続いて、その時三斎公が使用していた桑の柄の火箸について話された。桑の柄の火箸は、もともと利休が風炉用の火箸として使つていたものであるが、取り違えて炉の火箸として使われるようになった。この瓢の炭斗には相撲取りという銘を付けた。これは古田織部から戴いたものである。見事なものであるのだが、口が狭いので簡単に炭の出し入れができない。「手を取る」ことから、相撲取りと名付けた。手を取るの相撲取りだから。

藤四郎作の春慶焼茶碗は、釉薬が冬柑のようにかさかさしている。

口縁には覆輪のように飴釉がかかっている。これは織田信長殿の普段使いの茶碗であつた。一乱の時紛失したが、壁屋が拾つて持つていたのを私（細川三斎）が手に入れたのである。久重が「春慶にこのような手の茶碗があつたのですか」と尋ねると、「だから春慶と云うのだ」と柔軟に仰せられた。

茶杓は利休作で、銘は「命トモ」と付けられている。ある時三斎公が茶杓を取り出し、その先を少し切つて、それを利休に見せた。

利休は直ちにその茶杓に手を加え、「舌切雀」と銘を付けた。利休はそれを三斎公に返さず、その代わりに「其方の御持用」として別の茶杓、つまり、この茶杓をくれたのである。このように手に入れた茶杓であるから「命トモ」と銘をつけたのである。「舌切雀」の茶杓は、今は上様（家康公）の所にある。天下一の茶杓である。

次は柄杓についての雑談である。利休は声阿弥指を所持していた。これは「地獄指抜指」と云われていた。利休はこの写しを一阿弥に作らせることになった。柄を指す時、自分の好みがあるので、その時は出掛けて行きその様子を見るから、と伝えておいた。

その当日、利休は一阿弥のところに行き、「これはかわが少し長いようだ」と云つたが一阿弥はまったく利休の意見を受け入れなかった。出来上がってから後で比べて見ると確かに厚紙程かわが高かつた。一阿弥は疲れきつてしまい、「どのようなものであらうと好み次第に作りましょう」といった。今の柄杓よりかわが少し高く大きめで、柄の厚み、丸みはコレノ正林指（松屋所蔵の正林指）に似て

いる。三斎は久重に柄杓を手渡し、拝見させながら、あれこれの詳細については話せない、と云われた。

久重が「これ程までに新しい状態で保持されるとは、誠に殊勝なことで御座います」と申し上げると、三斎公は「そのように保持する方法があるのだ」と云って、次のような話をされた。

ある時太閤秀吉公がハン内という人物に道服を下されたが、その道服の緒が少しも痛まないままであった。周囲の者たちが不思議なことである、と言い合っていた。そこで蒲生氏郷が「痛まない方法を教えて頂きたいものです」と云うと、ハン内は次のように答えた。「緒を結ばないことが秘訣です。道服は着ない訳にはいきまんから打ち掛けて着ますが、緒は結ばないでおくのです。結ばなければ痛むことはありません」と。この柄杓も使わずに仕舞っておいたからこのように新しいのだ、と云われた。

瓢（建水）は砂張のような金属製で、このような形（図形）である。三斎公は「利休と一緒に町中を歩いていたら、利休がこの瓢を買って私の下男に持たせておいた。そのまま利休と別れてしまったので、現在でもこのように私の所にあるのだ」と云われた。

薄茶入が出された時、相伴の七右衛門殿が、「この茶入の名は何と申されますか」と尋ねると、「これは雪吹というものだ」と答えられた。「この形は三斎公様がお切りなされたと世上では申されておりますが」と七右衛門が尋ねると、「否々、これも利休が形を切りだし、それを我等が一番に写したことから、世間ではそのように

言うのであらう」と、三斎公が申された。

山の井肩衝の由来は、金森出雲守可重の物語によれば、飛驒の国中を小壺狩りして取り寄せてみれば、その中に見事な瀬戸肩衝があった。これを秘蔵していたのであるが、今は細川忠利殿の所にある。今は出雲肩衝と呼ばれている。

右の話は尤もなことである。豊前一国を小壺狩りさせたところ、長持などに入れて持ち帰ってきたが、その時家中の松井佐渡守康之が云うには、私のところにも上々の壺が御座います。イナズという私の所の鉄砲使いが丹波の亀山にて湯を貰って飲んだところ、その夫婦が湯とともに壺に香煎を入れて出してくれた。イナズはこれを見て「この壺を申し受けたいが」と云うと、夫婦は「たやすいことです。差し上げましょう」という。イナズは満足に思い、「代金は如何ほど」と問うと、「代金など必要ありません。代金は戴きません」と云う。「代金を受け取って貰わなければ壺をいただく訳にはいきません」と言えば、夫婦は「これは代金をいただくようなものではないです。代金はいただきません」と云う。「腰に銭を付けて持っていることなので、受け取っていただきたい」といくらいっても、「いただきます」の一点張り。互いのやりとりが大声になってきた。町の者たちが近寄ってきて「これは何事です」と尋ねると、右の仔細である。「これは苦にならない喧嘩である。仲裁いたしましょう。腰につけている銭をそのまますべて遣わすというのは道理にかなったことである。受け取りなさい」と云って、銭を

数えてみると、七十文あった。「ちょうど良い額だ」と云って、七十文を夫婦に取らせて町衆が仲介の労をとった壺である。

「こういった由来のある壺を持参いたしたならば物笑いの種になってしまいますので、出さないでおりました」と松井佐渡守が言うと、細川忠興公からその壺を是非とも出してくれるようにとの要望があり、持参いたしましたところ、「なんと見事な壺か」とお褒めにあらずかった。

しかし油断はできません。良いのも悪いのも良く承知いたしております、と云って一向に承諾しようとはしない。そこで忠興公は古田織部の云うことなら世間の人々も承服することであるから、というので古田織部に見せたところ、「天下」と称賛された。そこで直ちに牙蓋と仕服を作るよう織部に仰せ付けられた。この時松井佐渡守は「勿論私もこの壺が良いものであると内々では思っておりましたが、織部の言葉で納得いたしました」と云った。

三斎公は更に続けて言う。

この松井佐渡守が亡くなった時、家臣のイナズも主君の後を追って割腹した。周囲の者たちが思い留まるよう色々と説得されたが、聞き入れようとしなかった。「とにかく御恩があるのでお伴をしてお送り申し上げます。どなたの御意見があっても聞き入れることはできません」と云う。「その恩とは何か」と尋ねると、「未練はどちらに置いているのか、御恩の方である」と云って、切腹された。

この茶人には、人生という銘が付けられている。「人生七十古稀

稀なり」という古事から付けられたとも云われているが、現在は「山井」と云われている。

浅くともよしや又汲む人もあらし

われにことたる山の井の水

右の歌から「山の井」と名付けられた。「くむ我にことたる」という心である、と説明なされた。

三斎公は、「山の井肩衝」にかかわる雑談を更に続ける。

唐物茶入を持たずに瀬戸茶入ばかりを秘蔵するのはどんなものであろうか。唐物茶入を保持し、その良さを十分堪能したあとで、唐物以上に瀬戸茶入を大切に秘蔵するのであれば良い。古田織部から「勢高肩衝（唐物茶入）」を頂戴したので、お金を二千枚与えると、「勢高肩衝」は進呈いたしましたよう、と云う返事。これまで「勢高肩衝」は金子二千枚で取引されていた茶入である。承服できないと云うと、その代わりに金子千枚と「山の井肩衝」を下さい、と云う。こんなことは聞いたことがない。そもそも私が「勢高肩衝」を欲したのも、「山の井肩衝」があればこそのことであつた。「それはできない相談である」と、申し上げた、等々。

利休の表具という事は、徐熙筆の鷺の絵を表具したことからは始まったことである、などと詳しく、穏やかに話し続けられた。

松屋久好の頃の「カミ」は面白いものであつた、と語り始められた時、七右衛門殿が「久重殿の所には珠光舟の釘があるとか、利休は床用の竹釘を持っている」などと云われたので、三斎公は、「珠

光舟の釘はどこに打ってあるのだ」と尋ねられた。私（久重）は「床天井に三折の釘が打ってございます」と答えた。

三斎公は懷石料理を持ち出しながら、わたしも相伴に与りまじうと言つて坐ると、利休は亭主が相伴しなければ座が騒がしくてしかたがないなどと言つていた、と語り、「これは亭主の云い難いことであるが、今日のように料理のし難いことはなかった。精進料理と魚と鳥と三種類であつたから……どのような料理であろうとも、食ひ難い物は残しておいてよい、差し支えないことだ。利休の時代には菜もひとつかふたつようになっていたから、皆残さず食べていた。今は料理の数も多くなつてゐることだから、残さず皆食べるようにという訳にはいかない」等々数多くの雑談がおこなわれた。松屋久重は茶会当日の様子をすべて限なく記録しており、この茶会の記述はその一部である。

寛永十五年三月十五日晝、久重は道也・道務・御卜・江戸ヤと共に奈良町惣年寄、牛福四郎右衛門の茶の湯に招かれた。床に掛けられた軸は、米元暉筆、外題「青山白雲図」は能阿弥筆、

一 文字・風帯コン地ノ小文、昔ノ由、上下コイアサキ緞子、中白地金ラン、中文、是ハ新物ナリ、是ハ多門山ノカワラハヤシ左馬亮所持ニテ南市問屋御恵へ出シ被申候、昔ハ夕陽ト云ツル也、今は朝山トイワルル、一段見事成一軸也、又名物ノ朝山・夕陽ハ、趙昌筆ニテ各別也、殊ニ扇面也、皆々取チカヘテ云ソ、外題所望ニ付、久重一巻又所望ニテカクル也、

同十月二十日朝、久重は桑山宗庵・辻閑斎・守顯と共に細川休夢老に招かれた。ここでは古瀬戸の水指について、その由来が語られた。

古瀬度ヌリ蓋水指、底ニ利休判アリ、此由来ハ、利休ヨリ古溪和尚へ判ヲシテ、遺物ニ行也、古溪和尚ヨリ玉甫和尚へ行、玉甫ヨリ休夢へマタ遺物、

同十七年四月十七日朝、久重は辻閑斎と共に細川三斎に招かれた。場所は京都吉田の広間である。久重は、その二日前に病氣見舞いとして吉田を訪れ、色々と話をつかがつた。その折十七日の茶の湯の約束が成された。帰り際に、次の間まで見送りに出た三斎は、「朝早々ハ不成候ソ、五時分ニ待ソ、江戸ニテモ、御年寄衆ニ御礼云モ請問敷候、御返事モ中間敷候、御用中数奇之礼ハ御無用ニ候、法度ニ被成候ヘト云ハ、尤トノ事也、然ハ今ヨリ法度トノ義ニ候間、十七日ノ礼モ、其通ニ心得ヨ、為其、是迄出タルソト」と申されたので、十六日は前礼にも行かなかつた。

当日は大雨が降つた。

大雨降申候付、カナタコナタニ茶堂共ヲ被付置、雨ノ下タル所ハ早く通シ、又々ぬれなと御念入候……扱、染付菱ノ香入ヲ取出シテ、茶堂ノ意齋ヲ呼、香ヲ御タカセ候、火ノ遠キ所者火不付、火ツヨキ所者、モユルソト也、モハヤ料理セヨト御申候、次ニ中柱ノソトへ御出候テ、掛物ノ御講釈有之、床ヘモ御上リ候テ、内々御語り候、江戸ニテ此度（將軍家から）拝領ノ掛物

ニテ候由……

掛物の大きさ・様子・内容（定家の歌など）が詳細に記されている。この軸の一文字・風帯は利休の氣に入った裂地であった。本紙には、定家の歌、大江朝綱公の詩が書かれている。これについて細川三齋から詳細な講釈が行われる。

是ハ、其心ノ狂ランニシテ、クルイヨミニ述懐ノ思ソノママヨミ候ハントノ事也、尤トテ、俊成テンヲカケシ也、哥五種ソテンハミナ俊成也、定家ノ述懐ハ、昔吉野ノ奥ヨリ、天人五人アマクタリ、禁中ニテ舞アソフ、其例ヲ以テ、国々ニテ、カタチヨキ女ノコウタナト能ウタイ候ヲ、五人アツメ、禁中ニテ舞アソフ、是ヲ五節ノ舞ト云、次第次第二其マネヒ有也、後鳥羽ノ院ノ御宇ニ、五節ノ舞姫へ、定家密通有之トテチヨクカン（勅勘）ナリ、禁中御壺トハツホノ内ノ事也、ハイ鷹ヲカワセラル、其結番ニ定家御加候ニ付、人ノサンソウニヨリ、口惜トテ、其時述懐ノ哥也、是ヲ俊成へ談合ノヒコン也、其ノチ俊成卿哥一首詠テ、此ウタニテ、其理聞へ候テ、召ナヲサル、ト也、委ハ千載集ニ見ヘタルト御語り候、此掛物ノ由来ハ、冷泉殿家宝ヲシハテ、伽羅ノ枕ナト多、ダテ道具斗ニスカレ候ヲ、台徳院（徳川秀忠）殿被及聞召テ、無物躰也、勅符被為付候様ニト奏問有テ、勅符付候也、此時、台徳院殿一覽有度トテ、二ツ御モライ候内也、表具ハ餘悪敷候而ソトムクリテ取テ、置キ入事候ハ、又ソト入可申ト云ハ、御年寄衆云ク、カネ渡ノ御掛物

（徳光禪師の墨蹟）、ライ紙モ表具モナヲリ、台徳院殿御機嫌ニテ候間、表具ノ義少モクルシカル間敷候也、イマノ表具、中ニ大字ベタバト有之ヲ、方々御尋候テ、香具屋播磨所ニアリツル也、是ニ口伝有之、右ノ段々御物語リ被成候者也、

大分長い講釈が行われたようである。こうした長い内容の話をそっくり記述できる久重の記憶力には驚くばかりである。久重は、この講釈の後、風炉・釜・灰・炭の様子を図面で示し、その説明を加えている。

細川三齋は、右の物語の後「料理シソコナイタルヨ」と云いながら、膳を運び出された。給仕は禿二人がその任にあたった。

菓子が出されたが、炭斗を持ち出してきたので、菓子を取らないでいると、「先、菓子ヲ取候へ、餅サメテハ悪ソ」と申されたので、炭を直す間に菓子を戴いた。香合は染付の菱、伽羅の香木が一杯入っている。火箸で五切宛はさんで風炉に入れ、その後、直接指に挟んでくべた。

灰ハミソレ也、鉢ニツキヤウ、イロリノ時ヨリハスクナキカ、閑齋問云、此灰ハホイロニテ後座候哉、三齋答云、是ハ常ノカマトノ灰ヲフルイ、炉灰半マセタルモノ也、利休如此也、ホイロ灰ハ近キ事也

炭点前の様子が詳細に記され、炉の拝見も終わり、点前に入る。いちいちその点前の様子が記され、茶碗に茶を掃き、茶杓を茶入の上に返した段階で、三齋が「茶ワンハ前サキイツレカヒクキソ」と、



質問された。茶頭の意齋が「前ノ方ヒキク候」と答えると、

好ソ、先待候へトテ、釜ノ蓋ヲ取、湯ヲ入、トクリト能々御フ  
リ候也、但、筈ヲマワシハセス、扱、意齋ニ立タルカ見ヨト也、  
一段能立申ト云テ、意齋ハ障子ヲ立テ入候也、客ヨリ是非共ト  
申テ、初口ヲ三齋、茶ワンノモチヤウ、別成事モ無之候、左ノ  
人サシユヒ少イキヤカ也、二口閑齋、三口久重、吞仕舞候……  
御茶ハ寒之内、江戸へ御下シ被成、拂底ニ付、(細川)休無ニ  
モライ候、能ハ有間敷候、上林竹庵茶ト云ツル也、今度竹庵ニ  
初テアITALト御語候……

次の雑談は、古田織部と桑山左近とが暫くの間仲の悪い状態が続  
いていた頃の話である。

或る時、忠興公(細川三齋)は谷の出羽と共に織部の茶の湯に招  
かれた。奈良の町人春田又左衛門も連れて行くことにしたが、桑山  
左近にも同道するようにと言った。左近は、「織部の所へは行けな  
い状態にあります。同道することは出来ません」と言った。しかし  
「嫌であろうとも、無理にでも連れて行く」と言えば、「それでは、  
織部殿にその旨を伝えて置いて下さい」という。「それには及ばな  
い。嫌であろうとも、何であろうとも、同じ心を持っている以上そ  
の必要はない」と言つて、左近も連れて行った。

さて、炭点前の折、織部があまりにも手間がかかっているのに業  
を煮やし、「それにしても手間のかかることだ。適当に置いて下さ  
い」と言えば、織部は「何共何共、細川様の御前でそれはできませ

ん」と言つて、炭点前に心を集中する。炭が終わり、織部は勝手に  
下がり、障子を閉める。客は風炉に近寄つて拝見する。「誠に見事  
な炭だ。風炉の内部がこれ程までにきれいなるものであるうか。  
左近、これを見て、非難すべきことがあるか」と三齋が云うと、  
左近は「さてさて誠に見事な炭である。驚きました。織部殿は茶の  
湯の腕前を上げ、非常に見事な成果を上げられるように成り申した」  
と言つた。織部は障子の内から、クツクツと吹き出し笑い出した。  
左近も笑い、三齋たちも皆大笑いすることになった、と話してくれ  
た。

一 信長ハ心遣上手也、何事モ自身見ニ御アリキ候程ノ人ナレ  
共、甲斐ノ信玄被果候テカラ、油断出来候テ、何事モ内ノ者共  
ヲ五人三人ツツ、被遣候ヘハ、我為斗能様ニスル故、御為ニ惡  
成候也、兎角ニ油断惡也、シンケン(信玄)ヘハ、内證ニテ細々  
被通候也、其コロハ無之事成ニ、銀子百枚商人ニ言傳、度々被  
遣候、又卷モノナトモ多被遣候、シンケン果候テモ、三ヶ年ハ、  
世上ヘ不知候、シンケン果候間、心安ト油断候ヘ共、武田四郎  
(武田勝頼)仕置ヲ能候故、少モミタレス候ナトヲ、段々御物  
カタリアリ、

一 玄旨(細川幽斎)ニ、十三匁スアイノ鐵砲アリシニ、土ヲ  
堀ハイリテ、糸ヲ付、引ハナツ、其時分ハナキ事ト云シト御語  
り候、

寛永十八年六月二十九日の晩、久重は江月和尚に招かれ、龍光院

に出掛けた。四畳半台目の茶室である。床には密庵の墨蹟が掛かっている。この墨蹟は二十六行で印が一つある。四尺幅の床であるが、軸の両脇が一寸宛あいている。この軸の表具は利休がしたものである。この軸は、小堀遠州から戴いたものである。丸壺を載せた菱の盆は、祖父津田宗達の時代からあるものである。長さ八寸、横六寸斗、外側はグリグリ、黒し、内側は黒塗りである。この盆は、昔四つ程世上にあった。

寛永二十年正月六日朝、久重は興福寺常光院・千宗旦・久味と共に柳生但馬守に招かれた。四畳大目座敷の床には、法燈国師の墨蹟が掛けられている。これはこの度拝領したものである。表具は古田織部が行った。この墨蹟は天下に二幅あったが、一幅は信長殿の時代に滅亡し、今はこの一幅だけが残っている。法燈国師は虚堂の弟子である。この墨蹟は徳川家康様の所にあった。領地没収により獲得された道具である、と言われている。

正保五年三月二十三日、久重は御城衆五人とともに、板倉周防守殿の屋敷に赴く。

先ず居間でお茶を戴く。……お茶を二服点てられた。最初のお茶は戌の年のお茶である。篠耳二入、二服目は今年採れた子の年の新茶である。上様（家光）が試飲されたお茶である。これは京都にも日本にもあるものではない、と仰せられた。この二服の間に白湯を出されて、この良質の水を飲んで戴きたい、と言われた……。

(つづく)